

一、同施行令 大正十五年六月三十日勅令第二百四十三號を以て公布され同年七月一日一部施行、昭和二年一月一日より全部施行されたが昭和二年三月十一日勅令第三十號同年六月三十日勅令第二百二十號及昭和四年七月三十日勅令第二百五十號を以て改正され同年八月一日より施行された。

一、同施行規則 大正十五年七月一日内務省令第三十六號を以て公布され大正十五年七月一日一部施行、昭和二年一月一日より全部施行されたが昭和四年七月三十一日内務省令第二十九號を以て改正公布され同年八月一日より施行された。

一、健康保険特別會計法 第五十一議會の協賛を經、大正十五年三月二十九日法律第二十六號を以て公布され昭和二年一月一日より施行されたが第五十六議會の協賛を經、昭和四年三月二十七日法律第十二號を以て改正され同年四月一日より施行された。

一、健康保険特別會計規則 昭和元年十二月二十九日勅令第四號を以て公布され昭和二年一月一日より施行されたが昭和四年三月三十日勅令第三十五號を以て改正され昭和四年度より施行された。

一、健康保険特別會計事務取扱規則 昭和元年十二月三十日内務省訓令第二號を以て公布され昭和二年一月一日施行されたが昭和四年七月三十一日内務省訓令第十一號を以て改正公布され同年八月一日より施行された。

社會部所管

一、船員保險法案 昭和六年二月第五十九議會に提出されたが、衆議院に於て委員付託となりたる儘審議未了に終つた。

一、公益法人の設立認可に關する事務 明治二十九年四月二十七日法律第八十九號を以て公布された民法第三十四條の規定に基き社會事業に關する公益法人の設立認可の事務を取扱つてゐる。

一、罹災救助基金法 第十三議會の協賛を經、明治三十二年三月二十二日法律第七十七號を以て初めて公布され同年四月十一日より施行されたが第二十一、第二十六、第三十七、第四十議會の協賛を經、明治三十八年三月法律第三十六號、明治四十三年三月法律第二十九號、大正五年三月法律第三十號及大正七年三月法律第十九號を以て四回改正された。

一、北海道罹災救助基金法 明治三十八年三月一日法律第三十七號を以て公布され、明治三十八年三月勅令第百十三號を以て同三

十八年四月一日より施行された。

一、沖繩縣罹災救助基金法 明治四十二年三月三十一日法律第十九號を以て公布され、明治四十二年四月勅令第七十八號を以て十四年二月四月一日より施行された。

一、恤救規則 明治七年十二月八日太政官達第六十二號を以て公布され今日に至つてゐる。

一、棄兒養育米給與方 明治四年六月二十日太政官達第三百號を以て公布され今日に至つて居る。

一、三子出産の貧困者へ養育料給與方 明治六年三月三日太政官布告第七十九號を以て公布され今日に至つて居る。

一、棄兒養育米被下は自今滿十三年を限りとし及年齢定方 明治六年四月二十五日太政官布告第百三十八號を以て公布されたが其の後明治六年十月太政官布告第三百四十號によつて改正された。

一、教育所に在る孤兒の後見職務に關する件 明治三十三年三月十三日法律第五十一號を以て公布され同三十三年四月一日より施行された。

一、教育所に在る孤兒の後見職務執行に關する特例 明治三十三年四月十三日勅令第四百四十四號を以て公布され同日より施行された。

一、救恤に關する寄附金保管出納方 明治三十三年八月三日勅令第三百二十九號を以て公布され同日より施行されたが其の後明治三十九年二月勅令第二十號及同四十二年十一月勅令第三百十九號を以て二度改正された。

一、救護法 第五十六議會の協賛を經、昭和四年四月一日法律第三十九號を以て公布され昭和七年一月一日より施行される豫定である。尙同法施行と同時に前記「恤救規則」、「棄兒養育米給與方」、「三子出産の貧困者へ養育料給與方」及「棄兒養育米被下は自今滿十三年を限りとし及年齢定方」は廢止される事になつて居る。

一、行旅病人及行旅死亡人取扱法 明治三十二年三月二十八日法律第九十三號を以て公布され十年七月一日より施行された。

一、行旅死亡人を火葬するの件 大正元年十月十六日勅令第三十四號を以て公布施行され今日に及んでゐる。

一、行旅病人死亡人等の引取及費用辨償に關する件 明治三十二年六月十七日勅令第二百七十七號を以て公布され、同年七月一日より施行された。其の後明治三十二年八月勅令第三百六十七號同三十九年六月勅令第三百三十二號及同四十年十月勅令第三百十九號を以て三度改正された。

一、北海道舊土人保護法 第十三議會の協賛を經、明治三十二年三月二日法律第二十七號を以て公布され同年四月一日より施行されたが第四十一議會の協賛を經、大正八年三月法律第六號を以て改正された。尙本法主管事務は昭和二年六月十五日内務省地方局より當局に移管された。

一、同施行規則 明治三十二年四月八日内務省令第五號を以て公布され明治三十九年六月内務省令第十四號によつて改正された。

一、軍事救護法 第三十九議會の協賛を經、大正六年七月二十日法律第一號を以て公布され大正七年一月一日より施行された。

一、同施行令 大正三年十月三十日勅令第二百六號を以て公布され大正七年一月一日より施行された。

一、癲癩院法 第二十二議會の協賛を經、明治三十九年四月七日法律第二十九號を以て公布され同年九月一日勅令第二百十三號を以て施行され癲癩院の設立を見るに至つた。其の後第三十議會及第四十六議會の協賛を經、大正二年五月法律第一號及大正十二年三月法律第二十八號を以て改正され大正十二年四月一日陸軍大臣管理より内務大臣管理に移り當局の主管となつた。

一、同法施行規則 大正十二年三月三十一日内務省令第十號を以て公布され同年四月一日より施行され其の後同年十月二十日内務省令第四十二號、昭和二年四月六日内務省令第二十三號を以て改正された。

一、感化法 第十七議會の協賛を經、明治三十三年三月十日法律第三十七號を以て公布され、同二十五年四月一日神奈川縣に於て施行されたのを初とし漸次各府縣に於て施行を見るに至つた。第二十四議會、第四十五議會の協賛を經、明治四十一年四月法律第四十三號、大正十一年四月法律第四十三號、大正十一年四月十七日法律第四十四號を以て改正され大正十一年十一月勅令第四百八十七號を以て大正十二年一月一日より施行された。

一、同施行規則 明治三十四年八月六日内務省令第二十三號を以て公布され大正十一年十二月二十七日内務省令第二十八號を以て

改正され、大正十二年一月一日より施行された。尙昭和二年四月六日内務省令第二十五號を以て改正を加へ今日に及んでゐる。

一、社會事業獎勵 明治四十一年度以降政府は毎年紀元節の佳節に全國社會事業中成績優良なる團體並個人に對し獎勵金又は助成金を交付して斯業の發達を助け毎年の金額は同一ならざるも昭和五年度に於ては三百一團體に對し四萬四千圓の獎勵金を交付した。明治四十一年度より昭和五年度まで二十三年間に總額約壹百拾壹萬五千圓を交付して居る狀況である。尙昭和五年度社會事業調査及獎勵費は五萬二千六百四十圓である。

一、住宅組合法 第四十四議會の協賛を經、大正十年四月十二日法律第六十六號を以て公布され同年七月十日より施行された。

一、同施行規則 大正十年七月六日内務省令第二十一號を以て公布され同年七月十日より施行された。

一、不良住宅地區改良法 第五十二議會の協賛を經、昭和二年三月二十九日法律第十四號を以て公布され昭和二年七月十五日より施行された。

一、公益質屋法 第五十二議會の協賛を經、昭和二年三月三十日法律第三十五號を以て公布され昭和二年八月十日より施行された。但し資金融通は大正九年四月一日より開始してゐる。

一、低利資金融通 各種の福利施設及社會事業等に對して資金の融通をなし大正八年度より公營住宅に對し開始されたもので逐年公營住宅、住宅組合、産業組合、公益質屋、公設市場、職業紹介所、共同宿泊所、授産場、醫療保護、學園擴張、育兒院建設、不良住宅改良事業、簡易食堂、共同浴場及隣保事業等に融通して實績を擧げてゐる。

一、融和事業に關する事務 大正九年度より實施され地方廳の融和事業費に對し之と同額の國庫補助金を交付することになり今日に及んでゐる。

一、勤儉に關する事務 大正十三年八月二十日閣議に於て勤儉獎勵計畫要綱を決定し之に基き中央に於て内務大臣を會長とする官民合同の勤儉獎勵中央委員會を組織し、地方委員と相呼應して之が趣旨の徹底を期する所あつたが昭和四年三月三十日を以て該中央委員會は廢止された。

- 一、教化事業に關する事務 大正十二年度より實施されたが昭和三年十月一日文部省に移管された。
- 一、職業紹介法 第四十四議會の協賛を經、大正十年四月九日法律第五十五號を以て公布され大正十年七月一日より施行された。尙本法に基き大正十二年三月勅令第七號を以て、職業紹介事務局官制を公布同年四月一日より施行され、其の後大正十四年四月及昭和二年四月兩度の改正あり、現在中央及東京、大阪、名古屋、福岡及青森の五地方職業紹介事務局が設置され昭和六年度より二ヶ所増置されることになつてゐる。又大正十三年十二月勅令第三百二十號を以て職業紹介委員會官制を公布施行せられ、職業紹介事務局に職業紹介委員會を置かれた。
- 一、同施行令 大正十年六月二十九日勅令第二百九十二號を以て公布され十年七月一日より施行されたが大正十二年勅令第八號大正十四年勅令第二百四十號を以て改正された。
- 一、同施行規則 大正十三年十一月二十七日内務省令第二十九號を以て大正十四年一月一日より施行された。
- 一、職業紹介所費補助 大正十年七月一日開始して建設費初度調辦費其の他の諸費に對し補助金を交付してゐる。
- 一、海外移民獎勵に關する事務 關東大震災震災地方の罹災者に對し南米移住獎勵の趣旨を以て大正十二年度貳萬圓を計上し其の渡航船賃の補助を始め百名分を補助したが此の頃より國民の海外移住熱は一時に高調して來たので政府に於ても大正十三年度に於ては一躍六拾萬圓の渡航補助金を豫算に計上するに至つた。爾來年と共に海外移住を希望する者多く政府も亦渡航補助金の増額を計り大正十五年度に於ては五千名分に對する船賃補助金として壹百萬圓を計上したが殆んど十年十二月中に五千名分を補助し盡すの状況に至つたので昭和三年度に於ては九千八百八十名分壹百五十拾萬六千四百圓を増額し、夫々十二歳以上六十六百二十一一名（一人に付貳百圓）、十二歳未滿七歳以上一千二百八十五名（一人に付百圓）、七歳未滿三歳以上一千二百七十四名（一人に付五拾圓）に補助した。是等補助金は海外興業株式會社をして取扱はせたものであつて昭和四年度も前年度同様獎勵金壹百五十拾萬六千四百圓の補助を爲し益々移民の獎勵を圖る事としたが昭和四年六月八日勅令第五百五十六號を以て當局より拓務省へ移管された。

- 一、海外移住組合法 第五十二議會の協賛を經、昭和二年三月十日法律第二十五號を以て公布され昭和二年五月一日勅令第五百五號を以て施行されたが昭和四年六月八日勅令第五百五十六號を以て當局官制中より削除され同日勅令第五百五十二號拓務省官制公布に依り拓務省へ移管された。
- 一、海外移住組合法施行規則 昭和二年四月三十日内務省令第二十八號を以て公布され同年五月一日より施行された。
- 一、移民收容所 昭和二年七月十三日勅令第二百二十九號を以て公布され同日より施行された。昭和二年九月三十日に至る迄は所長、醫長、屬各一名にして醫官補を置かず同十月一日より所長、醫長各々一名、屬三名、醫長補一名を以て其の事務を擔當して居たが、昭和四年六月八日勅令第五百五十七號を以て當局より拓務省拓務局へ移管された。
- 一、公私經濟緊縮に關する事務 昭和四年八月九日閣議の決定を經、内務、大藏、逓信、農林、商工の各省官吏を以て公私經濟緊縮委員會を組織し同月十三日公私經濟緊縮運動に關する計畫要綱を決定し全國に此の運動を開始した。
- 一、失業防止委員會に關する事務 社會政策審議會の意見に基き昭和五年四月二十五日失業防止委員會を設置し公私事業の調節及失業防止並救済に關する事項を調査講究することになつた。尙同會の設置と同時に昭和四年九月設けられた事業調節委員會は廢止された。（昭和六年・社會局事務概要・一一一九頁）

## 第十五章 世界と日本

## 第一節 人類文化の發達

人類文化の發達を考察するに當つては、先づ文化と文明との區別を明らかにしてかゝらねばならぬ。湯原元一氏は之を説いて、

「文化とは何か。文化といふ言葉は近來の流行で、往々文明といふ言葉と混同されるが、これと區別して用ひられる場合には、文化は文明よりも一層深い意味をもつてゐる。

文明とは富力も増し、風俗も正しく、制度も整ひ、その上、學問・藝術なども盛であるやうな、約言すると、野蠻に對して開けた状態をいふ。文明はもちろん人の精神的産物であるけれども、その根底はまだ薄弱で動搖し易く、中には花の開落のやうに、忽ち榮え忽ち衰へるものさへある。他國の文明を移植した場合などには、特にそんなものが多い。我が國がかつて隋唐の文明を學んで、一時盛に典禮・制度を整へたが、間もなくそれが殆ど皆空文に歸してしまつたなどはその一例だらう。

ところが文明がその根底を深く國民の精神の奥底に据えて、たやすく動搖せぬこともある。この場合には、文明がたと國民の心に附着してゐるだけでなく、直ちに國民の人格に浸みこみ、その上これを培養してゐる。今日の文化といふ言葉は、こんな深い意味の文明を特に言ひあらはすために用ひられてゐる。或西洋の學者が、「文明は非宗教的であるのが常だが、文化はいつも宗教的である。」といつたのは、やはり文化には特に精神的深さが具はつてゐることを説いたものである。

だから、文化の特質は、それが人の精神的力作の結果だといふ點に存するといつてもよい。どんなに學問・藝術が盛なやうに見えても、もしそれがたと外部からの獎勵に餘儀なくされたか、もしくは何か或特別な利益を得るために起つたものであるなら、それは眞の文化を作り出すものではない。

また學問・藝術が専門家の間にだけ行はれて、一般の國民はこれに對して無關心であるなら、そこにもまた一國の文化は成立せぬ。こんな例は、東西の歴史によく見えてゐる。例へば、名譽心の強い國王などが、學者文士を優遇してその朝廷の威嚴を飾るために、著述製作に従事させた事實などに徴するとよくわかる。

また著述製作といふまでもなく、發明・發見などが續々と出ても、それがたと人の知力の勝利を示すだけで、一般國民の人格に少しもよい影響を與へぬなら、これもまたその國のために眞の文化を作り出したものとはいはれぬ。ドイツの科學の進歩は世界獨歩といはれるけれども、惜しいことには、その影響はまだ十分に國民の人格を向上させるに足らないやうである。従つて彼等が唯一の誇としてゐるいはゆる「ドイツ文化」もまた、こゝにいふ意味の眞の文化とはいはれぬ。

眞の文化は人の精神的力作に基づくもので、その上、結局は人格の向上と完成を究竟目的とするから、文化とは人を人にするもの、即ち人間性を培養・發揮するものに外ならぬものといつてよい。」

(新制中學修身教本卷四・二二一—二二五頁)

人類文化の發達は、人類社會の教育と密接不離の關係にあるものであるが、そのことに關して、余

は次のやうに考へてゐる。

『ドイツにおいて、千九百二十七年に公にせられた國民學校に關する法律草案、正確にいつて「憲法第四百四十六條第二項及第四百四十九條ノ施行ニ關スル法律案」に、國民學校の目的を規定して「總テ獨逸國民學校ハ、ドイツ文化財ノ初步ノ教授ニヨリテ、學齡兒童ヲシテ、其ノ身體的並ニ精神的才能ヲ練磨セシメ、且ツ家庭教育ヲ支持シ、補完シ、繼續シツツ、彼等ヲシテ有徳ノ人タルト共ニドイツ國民團體ニ奉仕スルノ能力ト準備トヲ有スル公民タルヲ以テ共通ノ目的トス。』  
といつて居ます。この草案に對して、ドイツ聯邦中の最大邦たるプロイセンは之を次のやうに改むべしと提案致しました。それは

總テ獨逸國民學校ハ、ドイツ文化財ノ初步ノ教授ニヨリテドイツ國民性並ニ團體協調ノ精神ニ留意シツツ、學齡兒童ヲシテ、其ノ精神的並ニ身體的才能ヲ練磨セシメ、且ツ彼等ヲシテ有徳ノ人タルト共ニ、ドイツ國民團體ニ奉仕スルノ能力ト準備トヲ有スル公民タルヲ以テ共通ノ目的トス。

といふのであります。家庭教育云々といふことを除いたゞけで、他は全くドイツ國(聯邦)の草案と同様であります。法律草案たるに止まりますから、ドイツ國原案も、プロイセン邦修正案も、まだ現行法となつて居ないことは注意されなくてはなりません。さて、本草案において強くわれわれの注意を惹くところの一點はドイツ文化財の初步の教授によつて、初等教育を行ふといふことでもあります。これは教育は文化財の傳達を不可缺の要件とするといふことの宣言でありまして、深く注意されねばならぬものであると信じます。かやうに教育と文化とを結ぶことが、何故に、生活

主體の性格的規定とその環境的影響との諧調點となり得るか、は引續いて究明されねばならぬこととてありますが、それに先だち、暗示に富んだ一見解を援用致しませう。

『ミニイアーヘッドは「世に『自修者』ありとは吾人の屢々聞く所なれども、畢竟此言たる極めて愚言といはざるべからざるを知らん。何人も正當なる意味に於いて自己を教育すと云ふを得ず。然もまた何人も、正當に他人より教育を得と云ふことをも得ざるなり。父母師傳はたゞ教育の源泉を彼に開鑿し説明するの補助をなすに過ぎず、其教育は、吾人の意識的に之を考ふるに先だちて早く既に端緒を開き、吾人が之を完成せりと想ふの後も長く存するものなり。知力上より云へばこは徹頭徹尾一團の知識を適用することにして、其知識たる單に個人の父母師傳の心に存するものに止らず、實に其小兒の生れたる社會の言語文學中に散布せるものを云ふなり、小兒は自己の觀念を世界に就て作出すべきものに非ず、又親師も其觀念を作り與ふるものに非ざるなり。抑々言語は實に全く社會の制定するところにして(アウグスツス帝嘗て曰く、朕の力を以て遂に一新語を作るを得ずと)其中既に區別概括の倉庫ありて小兒は之に適用するを始むるものとす。小兒の思想は其爲に用意せられたる鑄型に之を順應せしむ。彼等は(イ)其言語の到達せる精確の度(即其言語を有する社會の顯する所の知力進歩の段階)に準じて(ロ)其の小兒の直ちに接すべき社會たる人々の團體が到達せる開化の度に準じて(ハ)其父母及遠祖より遺傳せる腦組織に準じて精確となり十全となるべきものなりとす。書籍の如く文獻に顯れたる言語思想が社會的所得の一例たること、之に比して毫も劣ることなし。實に某々の人は書を著はすと稱せらる、彼は彼の名を其初に署し、引用書目を序跋に擧げたり、然れども多くの場合に於ては、其引用書の著者を表紙に明記して自己の名を目立ぬ片隅に屏

退すれば一層精確に其眞の事實を顯すべきなり。凡て彼のなしたる所凡て彼のなし得る所は、無量の時代の勞力によりて彼に供給せられたる材料を再鑄し燒直すにあるのみ。故にエマーソンは各人を以て剽窃者なりと告發せり。曰く各物は剽窃なり家屋は一の剽窃なりと。(桑木巖翼先生補譯『倫理學』一八八—一八九頁)

これは、凡て人は文化財を剽窃しつゝ自ら人となるものなることを説き得て妙を極めたものといはねばなりません。私の愛誦するところのものであります。家語六本篇に「善人と居る、芝蘭の室に入るが如し、久うして其の香を聞かず、即之と化するなり。不善の人と居る、鮑魚の肆に入るが如し、久うして其の臭を聞かず、亦之と化するなり」とありますが芝蘭の室に入ること久うして其の香聞かず、鮑魚の肆に入ること久うして其の臭を聞かないのは、世の常であります。芝蘭の香に包まれながら、その苦香を覺らないで居るのは、人柄の奥床しさを一入深くも致しませうが、鮑魚の臭を發散させながらそのことに氣付かないのであるのは、所謂鼻つまみものたるを失はないであります。しかし、自ら識ずして環境に左右されて居ることに至つては、即ち一であります。石川啄木は、「鏡屋の前に來てふと驚きぬ、みすばらしげに歩むものかも」と歌つて居ります。私も、この氣持は十分に味つて居ります。みすばらしげに歩む自分を惧れる心は、顔の寫りさうな窓硝子には、顔を背けて通るやうにさせます。散髪屋に行つても、成るべくは鏡を見ないやうに仕向けさせます。自分ばかり、自分のみすばらしげな姿を見ることを避けて居ても、他人には正體を見極められて居るのではないかと、自嘲する理性の聲を默殺して、たゞ一向に見まいとします。見まいとする心が嵩じて、みすばらしさを否定するやうになり、他人がその眞相を明かにでもしようものなら

そんな筈はないといつて、正面から抗爭いたします。いくら抗爭しても、瘦我慢は所詮瘦我慢でありまして日本人の皮膚の黄色であることは、歴然として一點の疑問の餘地をも容れぬ事實であります。

物の考へ方、眞相の掴み方、一言にしていへば統覺の仕方についても、事情は全く同様であります。われ／＼日本人が、事物の研究考察を致します場合には、いくら、科學的研究を高調し、客觀的考察を標榜致しましても、其の何處かに無意識的に日本的若くは東洋的な統覺態度を存して居ります。われ／＼は泣いても笑つても日本人であります。日本人である限り、日本的な物の考へ方を致します。どんなところは日本的であるかは、一概には申上げられませぬが、兎に角、日本的な物の考へ方をすることは、明々白々たる事實であります。随つて嘗てフランス人フイエがいうたところの「若しフランスにしてアメリカ化せんことを欲すならば、恐らくはフランスたることを失ふであらうが、さうかといつて、アメリカとならぬことも確かである。」というた言葉に、私は、深き感銘を覺える者であります。されば、人は自己育成によつて人となるとは申しましたが、それは、文化といふ環境的影響内における、自己育成者の性格的規定の發展に外ならないのであります。

文化と自己育成者との關係は、文化を財として考へますと、自己育成者の生活資料であります。文化を活動として把握しますならば、自己育成者の生活そのものとなるのであります。これから順を追うて文化とは何であるかを明かにして行きたいと思ひます。先づ文化と言ふ言葉について考へて見たいと思ひます。熟語としては、文化と開化とを壓縮したものであらうと思はれますが内容的には、ドイツ譯の *Kultur* の譯たることに疑ひはありません。文化と言ふ言葉が、文明とい

ふそれを横目に睨みながら、わが國に横行しはじめたのは、さまで古いことではなく、ドイツが世界の列強を向ふに廻はして戦ひ始めた大正四・五年の頃からであります。文明が物質的・一般的・自然的であるに對して、文化は精神的・個性的・歴史的であるといふことが、ドイツ文化への傾倒とも、強くわれ／＼日本人の心を惹いたのであります。

朝永三十郎先生も仰有るやうに「英國人の標語は『自由』詳しくいへば『政治的自由』である。獨逸人の標語は『文化』である。獨逸人も自由を尊重しないのではない。しかしながら其の高調するところの自由は、政治的自由ではなくして内的自由文化に於て實現さるゝところの精神的自由である。」さうして、この文化を標語とするところのドイツ哲學に、動きなき磐石の基礎を與へたものは、いふまでもなくカントの理性哲學であります。個人のうちにあつて、而も個人を超越する理性を、文化の産みの親とするカントの事業を「文化の批判的基礎付け」といひ得るならば、フイヒテ、シェリング、ヘーゲル、シュライエルマツヘル等の事業は、之を文化の「形而上學的基礎付け」といひ得るでもありません。何人もいふやうに、カントは文化哲學、さては歴史哲學を説いて審らかならざるものがあり、フイヒテによつて情熱的に唱導せられ、ヘーゲルに至つて哲學的に完備の域に達し、リツケルトによつて認識論的に把握せられたのであります。そこで、私はリツケルトが「文化科學と自然科學」において、文化に對して下した説明を、聞かうと思ひます。

「自然と文化といふ語は一義的ではない、殊に自然といふ概念は先づ、この概念に對立してゐるところの概念に由つて、一層詳細に限定されるのである。もし私達が、其語の本來の意味を違へずに維持するならば、私達は最もよく得手勝手な假想が、この言葉に附著しないやうにすることが出來

るであらう。自然の生産物は、ひとりで、土地から生長したものである。文化の生産物は、人々は土地を耕し、種子を播いておくために、土地から生ずるものである。されば自然は自ら生じたもの生れたもの、その自らなる生長に委ねてあつたもの、總和である。文化は價值ありと認めたるに隨つて行動する人間によつて、直接生産されたものであるか、または、その文化が己存的のものであるならば、少くともそれに附著せる價值のために、有意的に養護されたものであつて、自然と對立してゐるものである。

私達が此の對立を、たゞ私達の欲する範圍まで擴げて行くならば、必然的に次の點が、此れと關係を有してゐるのを認める。即ち人間から認められた價值が、凡ての文化過程の腦裡に具體化され、その價值のためにのみ養護されたものである。或はもし文化が己存的のものであるならば、そのためにのみ養護されたものである。これに反して、其の自ら生産し、生長したものは價值に關係なしに觀察されうる。そしてもしそれが、上に述べたやうな意味での自然に他ならないものとするならば、またかやうに觀察されねばならないのである。文化客觀には價值は結び付いてゐる。それで私達は、この客觀を價值に充ちたる現實在として、毫も實在性を伴はないために實在性を全く看過しうるところの價值そのものから區別するために、文化客觀を財と名づける。自然の過程は價值と結合してゐないものであつて、財と考へることは出來ない、其故に私達が或る文化客觀から、凡ての價值を解き去るならば、其客觀はそのために、たゞの自然となるのである。私達は、この價值への關係が、存在するかしないかに由つて、二種の客觀を確實に區別することが出來る。だから、私達がかやうに區別をなし得るのは、たゞ次の理由によるからである。この過程に附著せる

價值を除くならば、凡ての文化過程は自然との關係を有するものとして、随つて自然として見られねばならないからである。

現實在を文化財ならしめ、これに由つて、財を自然から區別せしめるところの價値の種類に關して、私達は次の要旨を附加せねばならない。價値に關しては、存在するか存在しないとかいふことは出来ない。只妥當するとか妥當しないとかが、いひうるのみである。或る文化價値は妥當するものとして、事實上普遍的に是認されたものであるか、または其價値の妥當と、價値が結びついてゐるところの客觀の純粹個別的意義以上のものが、少くとも文化人から公準されるからである。次に最高の意味に於ける文化にあつては、單なる意欲の對象が論ぜられるのではなくて、財が論ぜられねばならない、もし私達が一般に價値の妥當を論ずるならば、私達は、私達の生活してゐる社會を顧慮するに由るか、或は其他の理由に由つて、とにかく同時に多少なりとも、財の評價または養護をなす義務があると感ずるに至るのである。そこで私達は、凡ての人からたゞ衝動的に評價され渴望されるものと、文化客觀とを區別すると同時に、また單なる衝動に基くのではないが氣分の發作に基くものと、財としての價値とを區別するのである。」(佐竹哲雄氏譯「リツカート文化科學と自然科學」九八一—一〇一頁)

右の所説を要約して私は「文化とは何であるか、コーラーは神の創造物に對する人間勞作の所産の集積だとして居るが、文化をかく解することに就いては、多くの異論あるを聞かぬ。人間の勞作といふが如き有意的活動には、必ず目的がある。即ち、價値を目當てに勞作するものであるからその所産にあつては、常に目的としてゐた價値が實現せられて居る。この點から見て、文化は價値

であるといふ。自然の事業にはそれ自體として價値がなく、價値と關係せしめられたとき、それは既に自然の世界を離れて文化の世界に入り來る。」(「私法學序説」三一〇—三一三)というたことがあります。元來文化の原語クルツールといふのは、英語の Culture フランス語の Culture と同じく、耕作といふのを第一義とし、轉じて教養といふ意味に用ひられ、再轉して、文化といふ意味に理解せられて居るのであります。右のやうな譯で、文化とはもともと耕作を意味するものでありますから原野を開墾して、沃野良田として行く農業にも比すべきものであります。農業のことを、ドイツ語でアグリクルツールと申しますが、アグリといふのは土地のことであり、ますから、農業は即ち土地文化であります。これに對し、文化は即ち人間文化であります。未開の原野を開墾して沃野とし、その沃野において耕種植栽するのが農業であるのと同じく、自然一般を人間の目的理想に仕へしめるやうに加工し、それによつて、自然をして價値の衣裳をつけた自然とするのが文化であります。随つて、文化は之を二様に觀察することができます。いや、二様に觀察せねばなりません。その一は

文化作用そのものを意味します。これは、耕作そのものにも比せらるべきものであります。一日作用するところなければ、直ちにそこに停滞を生じて、雜草生ひ茂るに至るであらうところのものであります。作用そのもの、活動そのものが、即ちこの意味における文化なのであります。その二は

文化作用の所産を意味します。原野を開墾すれば沃野が残るやうに、文化作用の後には、價値意識に基いて加工せられた自然が残ります。之を文化財と呼んで居ります。繪三昧に終始するさ



る畫家が、「紙絹の上に描かれた繪畫そのものは畫家の排泄物でしかないのに、世間ではそれを珍重して買つて呉れる有難いことです」といふたのを聞いたことがあります。文化作用と文化財との關係を説き得て妙と申すべきであります。

さて文化に附せられて居る此の二つの意味は、明瞭に區別されねばなりません。前に述べたリツケルトの文化に對する説明は、科學の對象として考察せられて居た關係上、文化客觀即ち文化財に限られて居たことを注意せねばなりません。文化客觀即ち文化財として數へらるべきものは、宗教、教會、法律、風習、科學、言語、文學、藝術、經驗、並にこれらの職業に必要な専門的な方法などであり、それらのものゝ總ゆる發展の段階において、それらに附着して居る價值が、社會の各方面から妥當なものとして認められるか、または、それらの價值の是認を社會に對して要求するといふ意味において、全く文化客觀即ち文化財であると、リツケルトは申して居ります。續いて「私達の定義に由れば、國家は國民經濟や藝術と同じやうに、文化財であつて、何人もこの裡に恣意的な術語を見出さないものである。しかし地方に於て文化生活を國家生活と同一視することは出来ない。何となれば特にシエフェルが擧げてゐるやうに、織ゆる高い文化は、國家に於てのみ發達し隨つて歴史研究は若しそれが國家生活を前景に浮び出さしめるならば、法律の裡に存するとの所説が、よしんば正しいとしたところで、言語や藝術や科學などの多くのものは、其の發達に於て、一部分全く國家と關係のないものである。されば私達は總ゆる文化財を國家生活の下に配屬せしめ、由つて以て總ゆる文化價值を政治價值の下に持ち來すことの不能なるを、明かにするには、たゞ宗教について考察を施せば、それで十分である。」(佐竹哲雄氏譯「リツカート文化科學と自然科學」一一〇—一一頁)

と説いて居るのであります。そこで私は、以上述べ來りました、文化作用と文化財との關係を、われわれの生活を中心として考へて見ようと思ひます。私は人間の營む人間の生活を、文化生活と呼びたいと思ひますが、この文化生活には、單に文化財を利用し享樂するに過ぎぬ「享樂文化生活」と文化作用そのものゝ中に融け込んで文化財を創造する「創造文化生活」との、對蹠的關係に置かれた二つの類型の存することを認めたいと思ひます。

先づ享樂文化生活から考察を進めて行きたいと存じます。このことについて、既に他の機會において、私は「科學にしる、藝術にしる、宗教にしる、習俗にしる、我々の祖先が、自然に加工して創り上げ、之を共有財として我々に遺して行つて呉れた文化財を利用し享樂して生活する、それが文化財の享樂による生活略して享樂文化生活であります。例へば、私の家庭が電化されて居るとか、ラヂオが設備されてあるとかすれば、私は現在の科學的文化財を利用して生活してゐる、即ち科學を享樂する文化生活を營んで居るのであります。床の間に應擧の一軸を掛け、これに配するに古伊賀の壺を以てしてゐるとすれば、それは藝術を享樂する文化生活を營んで居るといふことが能きます。たゞ、その程度に低きと高きとがあり、低き享樂文化生活を高き程度に進めたとき、我々は自分の幸福を感じるのであります。」(「公民教育の根本問題」一四一—一四九頁)と述べて置きました。しかしわれわれの生活は、かやうな享樂文化生活に限られては居りませんし、また、限られて居てはなりません。現存文化財を、十分に利用し享樂して生活するとともに、新文化財の創出を伴ふ文化生活を營まねばなりません。之を創造文化生活と申すことは、既に述べた通りであります。創造文化生活によりまして、祖先から九十九の文化財を遺されたわれわれが、それを百にし百一にし

て次の時代の者に遺してやる事が能きるのであります。かやうに祖先の遺産たる文化財に何がしかを付け加へて之をネキストゼネレーションに遺す方法は、創造文化生活を営むことを措いて外にないのであります。而して、かゝる生活を貫く標語は、ワグナーの「簡單生活」において教へられる如く生活は簡に思想は高くであります。私は、聲を大きくして「生活は簡に思想は高く、これわが創造文化生活の極致なり」と申し上げたいと存じます。文化生活を目して、「生活は簡に」と申しますことについては、或る異存を挿まれる方があるかも知れませんが、私が嘗てこれに關して明かにした意見をこゝに引用いたします。「文化生活は簡單ではなくして複雑だと思つて居られるかとも考へますが、一面確かに其の通りであります。併し、文化生活は決して複雑ではない簡單であるといふことを、私は信じて疑はぬものであります。先づ文化を享樂すると云ふことは、實に簡單である。何故かなれば、以前には音樂會に行かなければ聴けなかつた立派な音樂も、今日ではラヂオに依つて極めて安易に簡單に聴いて楽しむことが出来るやうになりました。又東京の友人と居ながらにして話を交すことも出来るのであります。實に簡單である。昔なら、水盃をしてからでなければ旅立てなかつた江戸見物も、今では、寝て居る間に連れて行つて呉れます。是亦實に簡單である。享樂の方面から觀た文化生活は、斯の如く實に簡單であります。之を複雑だと申しますのは、享樂の背後に控へて居る所の文化財そのものをいふのであります。

私は寝ながらにして微妙な音樂を聴いて樂み得るといふ簡單さの背後に、其の事をして可能ならしめる所の色々な複雑極まる眞理の發見、その應用及び装置が嚴然として控へて居るのであります。我々は、安心し切つた安易な氣持で汽車に乗ります。併しその間に介在して居る諸機構

は、實に複雑を極めて居ります。斯様な譯でありますから、文化生活自體からいへば大層簡單であります。其の背後で我々の祖先の久しきに亘る苦心の結晶が複雑微妙に働いて居て呉れるのであります。我々は、昔の複雑極まる生活に比して、雲泥の差ある簡單生活を營むことが出来るやうになつたことを祖先に對して感謝すると共に、簡單化することによつて生じた餘力を活用して、次の者に對して我々の創造にかゝる文化財を、たとひ微少でも遺す覺悟がなければなりません。」

〔公民教育の根本問題〕一五二頁

教育は創造文化生活であり、創造文化生活は享樂文化生活を不可缺の前提とするといふ前述の所論と、文化相は社會的所得であると道破して居るミュイアーヘッドの所説とを綜合勘考して、い

たゞきますならば、自己育成者の伸びる方向の性格的規定の環境的影響との諧調點を、文化において求めることの妥當なる所以を、容易に理解して、いたゞけることゝ存じます。〔明日の初等教育〕五四―六九頁

而して、人類文化の原流は、之を極東文化・印度文化・回教文化・西洋文化に分ち得べきことは、坂口昂博士が、『世界に於ける希臘文明の潮流』において、『現代世界に於ける文明は多數の相異なる系統から成立し、各系統は種々の相同じからざる要素から組織されて居る。その要素と要素、その系統と系統の相互關係は複雑多様、眞に端倪しやすからざる交通性を有し、隨つて現代世界に千種萬態の社會現實を惹起して居る。是れ全く古來數十年間に於ける世界の歴史、上發展が産出したる成果である。これに據ると、現代世界の文明系統中、最も重要なものは、極東文明、印度文明、回教文明、西洋文明の四大系統であつて、各系統は更に幾多の文明要素に分析される。』(一一―一二頁)と述べて

居られることから明らかに観取せられる。坂口博士の所謂文明は、之を文化に置きかへて差支がなく。

注意一 生活を離れて公民教育を説き得べからざることは、縷々述べ来たところである。文化についてもそれと生活との關係を明らかにせねばならぬが、その場合、所謂文化生活に對する誤解を一掃せねばならぬ。この點を考慮して、余は、『人類は、その拘懐する理想を實現し、その生活を有意義ならしめんがために、努力・精進して自然を征服・利用し、以て人生に價値あるものを創造する。かくして造り出された物質的・精神的成果、即ち財貨・科學・文學・藝術・宗教・道徳・法制・傳統・國語・社會等を、文化財といひ、文化財創造の過程そのものを、文化生活といふ。文化生活は、また、文化財を、消費・利用する生活として理解せられることもあるから、前者を創造文化生活といひ、後者を利用文化生活と呼んで、兩者を區別することにしてゐる。既存の文化財を承繼する利用文化生活を前提として、創造文化生活を營み、以て、文化財を造り出すに至る全過程を總稱して、之を文化というてゐる。』（廣瀨・一四四頁）と説いておいた。いふまでもなく、創造文化生活を本位とするのである。

注意二 文化に個性あらざるべからざる所以の理を知らしめ、且文化が祖先の遺産なることの意識を明確ならしめんがために、余は、『文化は、國民性や自然の環境の異なるに應じて、それぞれ、個性・特色を有するとともに、時代の異なるによつて、その態様は變化してゐる。しかし、一時代の文化は、それ以前の文化財に、何ものかを附加することによつて、次第に發達して來たものであるとともに、來るべき時代の文化の基礎を成すものであるから、文化は、個性を保有しつつ、生々發展するものといふことが出来る。その發展の道程において、偉大な思想家・藝術家・科學者・教育者等が現はれて、特別な貢獻をなしたことはないふまでもないが、世に聞ゆることのなかつた我等の祖先も、また、文化の發展に寄與するところありしを思はねばならぬ。』（廣瀨・一四五頁）と注意しておいた。

注意三 人類の文化の發達を説いて、『文化は、社會といふ苗床に生え育つものであり、それが他の社會との接觸によつて繁茂す

るものである以上、社會の成立し得ないところに文化の生まれ出る筈はないのである。故に、人の生活に適する氣候を有し、生活資料のある様でなければ文化の發祥がない。世界歴史は、支那の黄河、楊子江の流域、インドのガンヂス、インダスの流域、メソポタミアのチグリス・エウフラテスの流域、エジプトのナイルの流域などを古代文化の發祥地であることを教へてゐる。これ等の土地は、いづれも氣候温和な上に、土地豊饒で、人類の生存に必要な條件を具備してゐて、夙く社會を成してゐたからである。

これ等各地に起つた文化のうち、インド文化の中核をなす佛教は、東漸して支那の儒教と結合し、更に、我が國に傳來し、醇厚中正な唯神道と融合して、燦然たる東洋文化を形成したのである。エジプトの文化は、西漸して、地中海沿岸の文化と接觸して、ギリシア・ローマの文化を大成したのである。その後、ギリシア・ローマの大文化は、基督教の影響を受けて、その發達は一時停滞したが、文藝復興以來、再び進歩の歩みを始めた。この西洋文化に一轉機を興へたものは、一千五百三十年、ポーランド人コペルニクスの發表した地動説である。抑々地動説は、紀元前五百餘年前、ピタゴラスこれを唱へ、後プロレメウス等の唱道したものであるが、これを證明するに至らなかつたものである。元來、基督教の聖書には、『神は、元始に天と地とを造り、この地の晝を照らすために太陽を造り、夜を照らすために月を造れり』と述べて、地球が天體の中心であることを説いてゐるに拘はらず、コペルニクスは、太陽が中心であつて、地球は、その周圍を廻轉する一遊星に過ぎないことを證明して、聖書の誤謬を指摘したのである。これによつてそれまで學界に偉大な勢力を有してゐた教會の束縛は、その威力を失ひ、自然科學に對する研究が起り、これより、あらゆる方面の文化が長足の進歩を遂げ、遂に西洋文化の花畑に絢爛目を驚かす自然科學の花を咲かせるに至つたのである。この自然科學の發達は、白色人種を優者の地位に置き、歐洲諸國を富強にし、全世界を壓倒し、これを支配するに至らしめたのである。』（坂田・一八七―一八九頁）といふ説明は、洵に適切なる注意である。

参考 西洋文明は現代世界の主流である。

人類の文化は黄河の流域に興り、インダス河の流域に興り、チグリス・ユーフラト河の流域に興り、またナイルの流域に興つた。

しかし社稷の榮枯盛衰幾千年、現代文明の主流は曾てギリシヤの岡に榮え、ローマの丘に榮えし謂はゆる西洋文明となつたことは、それが良否好悪は別として、正しく一の動かぬ事實である。吾々は支那と日本に發達したる和算を學ばずして西洋に發達した數學を教へられる。印度に發達した因明學を知らずして、ギリシヤ以來の論理學を習ふ。

もし斯くて世界文化史なるものが事實として西洋文化史を意味するものなりとせば、建國二千六百年の歴史を有する日本は今まで世界文化の上に餘り大きな役割を演じ來つたものといふことは出來ないであらう。むしろその地理的環境と政治的事情との影響よりして、世界文化の主流から離れて独自の文化生活を營み來つたものといふべきである。

固より主流を離れたるの故を以て低級なりとなすことは出來ない。時には主流を離れたるの故に價値あることもある。しかし文明の主流は人の考へ方の基準を決定し、從て價値判斷の尺度を決定する。人々はその基準に從て思考し、發言し、文章を書き、その尺度を以て事物の善惡正否を評價する。故に文化の支流に在りて自から善きもの尊きものを把握するとも、その表現に於て主流の許す形式をとらない限り、もしくは少なくも主流に在る者の考へ方を以てして理解し得る如き形式をとらない限り、その善きこと尊きことを世界に承認せしむることが出來ないのである。主流文化はそれだけの優越を主張する。

古來西洋文明は物質的であり、東洋文明は精神的なりといふ。しかし文明はかかる概言的表現によりて十分區別し得る如く單純なものではない。種々なる點に於て種々なる違ひ方を示して居ることは茲に到底詳細なる説明をなし得る如きものではない。しかもその異なるは事實なるが故に、吾々は極めて長期間、主流文明と交渉すること甚だ薄く、從て之に貢獻することも少なくして過去を辿り來つたといふことも疑ひなき事實といへよう。(中川善之助氏・公民教本下巻・一七四—一七六頁)

## 第二節 文化史上の我が國の地位

我が國の文化は、日本民族の文化である。日本民族の底力は、先づ儒教と共に入つて來た支那の

文化支那を通じて入つて來た佛教、佛教を中心とする印度の文化を取入れ、次いで、キリスト教と共に傳來した西洋文化を吸收して、巧みに融合、同化し、以て所謂和魂漢才、和魂洋才の我が國文化を造り上げた。更に、明治維新に及んで、廣く知識を世界に求めんとする國是に基づき、國を擧げて西洋文化の輸入に努め、よくその物質文明の長を採つて、之を國風に同化し、偉大なる成績を擧げて、燦然たる現代文化を見るに至つた。しかし、我等は、單に、外來の文化を吸收、同化する利用文化生活に甘んぜず、進んで、我が國獨特の文化を創造して、世界の文化に貢獻すべき創造文化生活を營まねばならぬ。國家も、また、之を助長する。

先づ、日本民族の文化に影響を及ぼした儒教の傳來について檢するに、西晋一郎博士は、次のやうに説いてゐられる。

『漢學が支那の文物制度と共に夙くから、我國に大に影響を及ぼしたその程度範圍は専門の研究を以てしても盡されぬほどであらう。漢學と佛教とを除いて我國文化といふべきものがいかほどあるであらうか、否兩者は既に我國の文化そのものとなつてをる。即ち何程か日本化せられなない漢學佛教といふものは我國に於ては考へられない。只それは程度のことであつて、又何程か外來的なるものを帯びない所の漢學も佛教も考へられない。廣く漢學といふもその核心であるものは儒教である。此教は正史によれば佛教渡來以前百數十年既に這入つて來た。佛教の這入つたときは一大悶着が起つた。これは民族の鬭争が根であつたかも知れぬが、しかし佛教の禮拜僧尼の尊崇といふ如き我國に全然固有せぬものゝ入來であつたからであらう。儒教もよく吟味すれば我國柄と合はないものを有つてはをるが、またそこまでは深く知るに及ばず、日常大體我國

に既に行はれてゐた人倫を説いたものであるから無事に這入つたことと思はれる。支那の政教思想によつて刺戟せられたものであらうか、我國の成り立ち、我國柄の何たるかが、何程か反省せられてゐたに相違ない。であればこそ佛教といふ異物に接して神道とか古道とかいふ字面が始めて用明天皇紀維古天皇紀に見えて來た。佛教が漸く盛んにならうとするに際して我國有のものが自覺せられ初めた。其後唐制に倣つて大いに國の制度を改革せられようとするに當つて、却て上古神聖の迹に隨つて天下を治むべしといふ意識が明かとなつたことも孝徳紀に見えてをる。聖徳太子の憲法には治國の術として儒學がいかに深く理解せられ、特にいかに適切にその君臣の教が日本化せられて居たか、殆ど想像も及ばぬ位であつた様子が見える。若し此勢で進んで行つたならば儒教は學問としても大いに我國に發達したであらうが、其後我國の歴史はさやうな迹を見せてをらぬ。しかしとにかく大學が設けられて、漢土の文物を傳へる制が立てられ、その中に經學専門の博士も置かれ、その職を世々にする家もあつたのであるから、時に盛衰はあつたらうが、經籍を我國なりに讀み下す道は次第に開かれつゝあつたと見える。經書の解釋といふ如き知られたことの外に、廣く文學歴史等の學を通じて、又文物制度の模倣を通じて、儒教が我國に浸潤し來つた情は、詳かにすることは容易ならぬことであらう。我國文化發達の歴史的研究の大なる領域が此所にもあることと思はれる。その中にも日本化の迹といふことが中心問題である。單なる模倣輸入では十全なる意義に於て我國文化の發達とは言ひ難い。

さて我國に於て儒教はすつと降つて徳川時代に格段の發達をしたことは普く知られてをる。盛んになるとはいろく／＼の流派が生ずることであると言つてもよい。當事支那傳來のものとし

て最も有勢であつたのは宋學、狭く言へば程朱學であつたし、これに對して我國の學者の説として最も大なるオリヂナリチーを發揮したものは仁齋學と徂徠學とであつたことは異論のない所であらう。(岩波講座、哲學、東洋哲學史、四一六頁)

更に我が國の文化と佛教文化との交渉については、和辻哲郎博士は、

「日本に於ては、佛教渡來後僅かに二世紀にして東大寺の大佛を作り、二世紀半にして最澄や空海の如き學者を出すまでに至つてゐる。この間の諸事蹟はその文化的意義の豊富さに於て歐羅巴の十二三世紀或は十四五世紀にも比すべきであらう。既に佛教渡來後一世紀ならずして五十に近い寺が建立せられてゐる。かゝる寺院の意義を知るために一二の例を擧げるならば、先づ佛教渡來後半世紀にして建立せられた四天王寺である(593)。それは佛教受容に反對して敗れた物部氏の没收財物によつて營まれる寺であり、さうして佛教の慈悲の理想を社會的に實現しようとしたものである。その中心をなすものは、東西八町南北六町の敬田院であつた。そこには大きい伽藍が立ち並んでゐる。さうして金堂には救世觀音、夏堂には阿彌陀佛、冬堂にも觀音といふ如く、慈悲の佛がまつられる。食堂が七間の瓦葺といふ大建築であつたことから考へると、僧衆を收容する設備もよほど大きかつたらしい。こゝに人々は建築、彫刻、繪畫、經典、讀經、說法、音樂、舞蹈等を綜合した禮拜の場所を持つたのである。が四天王寺の意義はこの敬田院の他に更に施藥院、悲田院、療病院の三院が存在したことに存する。施藥院は藥草の栽培、製藥及び施藥のことを營み、療病院は一切の男女の無縁の病者を寄宿せしめて「師長父母」の如く愛撫療病することを仕事とした。悲田院は貧窮の孤獨單己頼るなきものを寄宿せしめ日々眷顧して飢渴を救ふところである。即ち

精神的な救ひを目ざす敬田院と物質的な救済を目ざす貧民病院・貧民宿舍・施藥事業とが合して一の四天王寺を形成したのである。しかもそれは『傳道のために』行はれたのではなく、それ自身慈悲の實現の努力であつた。縁者間の自然的情愛に於てのみ相互扶助の行はれてゐた時代に、無縁のものに對して救ひの家を提供することは、それだけですでに新しい立場の實現を意味したのである。況んや支那傳來の藥草の流布が當時の社會にとつて如何に重要であつたかは、この後一世紀ならずして在來の狩獵が藥草狩りによつて置き換へられたことによつても知られるであらう。以上の如き意味を持つた四天王寺に對して、それより十四年後(601)に建てられた法隆寺は、法隆寺、問寺といふ名稱自身が示してゐるやうに、歐羅巴の大學に當るものである。もとよりこの學問は藝術や宗教と離れたものではない。當時移植せられた大乘佛教は、極めて強く哲學的な傾向を持つものではあつたが、しかし同時に印度古來の神話・信仰・文學等を包括し、更に希臘の影響を受けた建築・彫刻・繪畫・音樂・演劇等をも含んだものであつた。さうして學問とはかゝる大乘佛教を學び取ること以外ならなかつたのである。我々は幸にしてこの法隆寺の主要部を今なほ目のあたりに見ることが出来る。かくも美しい『學問寺』が十世紀以前のゲルマンの世界のどこに建てられたであらうか。

寺のみではない。我々の歴史は592に聖德太子が勝鬘經を講ぜられたことを、更に596には勝鬘經と法華經とを講ぜられたことを傳へてゐる。さうして太子の作と云はるゝ法華經・勝鬘經・維摩經の三經の疏は、我國に於ける最初の學問的著述として、今なほ我々の面前にある。これほどにも學問的に優れた著述が、九世紀以前のゲルマンの世界のどこに現はれたであらうか。

これらのことはフランク族がやつと基督教化したといはれる600の頃に行はれたのである。しかもそれは佛教に接してより僅かに六七十年にして起つた現象である。が更に驚くべきことは、佛教渡來後一世紀にして起つた大化の改新(645)である。これは聖德太子の憲法に現はれた政治的理想を實現したものと見ることが出来る。この改新によつて形成せられた新しい國家をカール大帝(800戴冠)の國家と比較して見るがよい。この皇帝の國家に基督教的な愛がどれほど具現せられてゐるであらうか。愛の實現は法皇の仕事であつて皇帝の仕事とは考へられなかつたのではなからうか。然るに日本に於ける新しい國家は佛教的なる慈悲の實現を目ざしたのである。このことは更に天武の治世(672-686)に至つて一層顯著に現はれてゐる。佛教の『移植』がいかに迅速に行はれたかは、これらの現象に於てまざらうと見得るではなからうか。

このことはたゞ『移植』だけの問題ではない。ゲルマンの基督教化がゲルマンの文化を高めることであつたやうに、日本への佛教の移植は日本の文化を高めることであつた。日本が文字を持ち己が國語の詩文を持つやうになつたのはすでに600の頃からである。我々に残されてゐる古事記は712に書き改めたものであり、またその頃の和歌も數多く萬葉集に保存せられてゐる。これほどに古い詩文がゲルマンの世界のどこに作られてゐるであらうか。カール大帝は獨乙の英雄詩を文字に移させたと云はれてゐる。しかしそれは九世紀のことであり、しかも今残存して居らない。況んや希臘の敘事詩にさへ比し得られるやうなあの芳醇な萬葉の歌は、文藝復興期以前のゲルマンの世界には到底比倫を見出し得ぬ。かくして『移植』の迅速は文化の展開の迅速を意味してゐるのである。『岩波講座・哲學・日本に於ける佛教思想移植史、六一八頁』というて居られる。

佛教文化が我が國文化の中軸を形成してゐるに拘らず、之をなほ佛教文化の移植として取扱ひ得るところに、我が國の文化が日本民族の文化たるを失つてゐないことを見るべきである。

西洋文化の攝取については井上哲次郎博士は適切にも、

『明治の哲學廣く云へば明治の思想の潮流を回顧して見ると、少くとも三つの段階に分ちて之を考へることが便利のやうに思ふ。第一期は明治の初年から明治二十五年迄とし、第二期は明治二十三年から日露戦争の終り迄、即ち明治三十八年迄とすることにしよう。それから明治三十八年から以後明治四十五年迄を第三期としたならば宜からうと思ふ。尤も第三期の思想の潮流は大正年間迄(即ち世界大戦迄)及んで居ることは云ふまでもない。明治の初年から明治二十三年迄に至る此の第一期の哲學を中心としたる思想の潮流は大體アウフクレーリングスツァイトで、英米佛の思想が優勢を占めて居つた。單に優勢と云ふ位でなく、澎湃として洪水の如く浸入して來た。即ち英米の自由獨立の思想、佛蘭西の自由民權の思想など、ふものが縦横に交叉して紹介され、主張され、唱道され、宣傳され、なか／＼廣く社會に禍を卷くやうな状態となつて來たのである。英米の學者では主としてベンサム、ミル、スペンサー、シジュウイツク、リュイス、バショール、バツクル、バツク。佛蘭西の學者では主としてルソー、モンテスキュー、ギゾー、コント、トクヴィールといふやうな人の思想が輸入され、そして自然科学の側ではダーキン、ハクスレー、チンダール等の思想が随分持て囃され、大分社會の状態も一般的に變化を齎したのである。

然し其の爲めに知識學問、教育、美術文學、孰れも急速の進歩を爲したのである。然れども傳統的の道德だの、宗教だのは餘程ひどく破壊されて、之に代るものが無く、善惡正邪の巷に於いて迷兒と

なる者が多く、社會的の缺陷も亦決して少くなかつたのである。憲法は明治二十二年二月十一日の紀元節を以て發布され、立憲政體も愈々茲に確立され、其の翌年、帝國議會も開催され、多年に亙る國民的要求も餘程充たされることになつたのであるけれども、唯だ國民の道德的風儀の一點に於いては遺憾の點が甚だ多かつたところからして、明治二十三年十月三十日を以て教育勅語が煥發されるやうになつた次第である。自分は丁度此の教育勅語煥發の際に獨逸から六七年ぶりに歸朝し、幾くもなく其の教育勅語を解釋し、『勅語衍義』と題して之を世に公にするの光榮を得たのである。それから丁度其の教育勅語の煥發せられた頃より東京大學に教授となつて教鞭を執り、三十三年間繼續し、其の間、宗教に關しては佛教を中心として比較宗教を講じ、哲學の側に於いては東洋哲學史と共に西洋哲學史を講じ、殊にカントとショーペンハウエルとを講じたのである。そのやうに、西洋哲學としては主として獨逸の哲學を紹介し、且つ之を學生に教へ込んだのである。而して哲學及び其の他精神科學研究の爲めに西洋に派遣せらるゝ留學生には主として獨逸に往くことを勧誘したのである。我が國に於いて獨逸哲學の重要視せらるゝやうになつたのは自分等の努力に依ることが多大である。尤も明治二十二年に來朝したブツセなども此のことに關係が無かつたとは云へない、それ迄の英米哲學を本位にして居つたのは非常に形勢が變つて來た、殊に大學及び其の他講壇の側に於いて然るのである。それで、明治二十三年は諸種の方面から見て哲學史上、一時期を劃してゐると思はれる。

それで、明治の哲學の第二期に於いては哲學を研究する者は孰れも獨逸の哲學を主として研究したのである。況して外國教師の哲學を擔任せるものとしてブツセだのケーベルだの、是等は孰

れも獨逸人であるから、此の哲學界に於ける傾向と看過すべからざる關係があつた次第である。斯様に獨逸の哲學を骨子として研究するやうになした影響は今日迄多大に残つて居ることを誰しも認めるであらう。唯だ今日は何うも兎角獨逸哲學のみによつて、餘りにそれに呑まれ過ぎて其の範圍から到底脱却し能はざるやうな状態となつてゐる。言ひ換へてみれば、獨逸哲學に拘泥し、又之に心酔することが極端となつたやうな状態である。これは甚だ遺憾なことである。そのやうにならないやうに、自分は初めから絶えず東洋の哲學を講じてバランスを保つやうに努力して來たのであるけれども、此の精神を能く汲み取つて呉れる人の甚だ少いのは遺憾に堪へない次第である。併し早晚目覺めて來るに相違ないと信じて居る。

明治三十八年以後は日露戦争の結果であらう、大分形勢が變つて來た。それより前に日清戦争があつたけれども、あれに較べると、日露戦争は一層影響するところが多く、其の結果思想界にまで變化を及ぼすに至つたのは怪しむに足らないと思ふ。尤も大正年間に入つて世界大戦があつたからして、これ亦非常な變動を齎したのであるけれども、世界大戦に先立つては日露戦争が我が日本に取つてはながく深刻な印象を與へ、非常な影響を我が思想界に及ぼしたのである。それで、日露戦争後は個人の自覺が顯著となり、狹隘なる愛國心より忽ち目醒めて、世界的の廣大なる精神が俄然發達し、或者は特に社會問題に深大なる注意を拂ふやうになつて來たのである。それで、明治三十八年を以て思想界に一時期を劃したものと云ふことも亦一つの見方であらうと思ふ。マア大きく觀れば斯かる小さな區別はさほど重要でないかも知れぬけれども、姑く便宜の爲めに斯ういふ三つの區別を立て、明治の哲學を論ずることにしようと思ふ。

それからして、明治の哲學思想、それに次いで大正の哲學思想、これを通じて二つの大きな違つた系統があると思ふ。それは固より何處の國にも自らあるけれども、明治以前には殆ど無くして明治以後には隨に鮮に辿つて行ける二種の系統があると思ふ。一つの思想の系統は物質的、經濟的、客觀的、實際的、而して功利的といふやうな系統である、ジエームスの所謂タフマインデッドの思想である。此の方面は社會に於いて何時も優勢で、随分極端まで行くことを常としたものである。

もう一つの側は唯心的、超絶的主觀的、道德的、宗教的といふやうな思想の系統である。此の側は前者に比すれば深遠となり、微妙となり、幽奥となり行くが、何うかすると世界と懸け離れて迂遠となり微細となるやうな傾向も無いではない。これはジエームスの所謂テンダーマインデッドの側である。此の二つの系統の相互關係如何、其の利害得失如何、又其の將來の成行如何といふやうなことに就いては尙本論に至つて論ずる心意であるが、兎に角過去約五、六十年の歴史は明に此の二系統の思想の潮流を歴史的事實の上に立證することが出来るのである。さうであるけれども、此の二つの思想の系統の間には種々なる程度の思想のあることを看過するわけにはゆかない。(岩波講座・哲學、明治哲學界の回顧、六一―十頁)

と要約して居られる。余は獨佛の文化を我が國に移植したる人達の效績を高く評價すると、もに、英國風の功利思想を我が國に移入し、我が國文化に劃期的な影響を與へた福澤諭吉氏の偉大さについて、特に世人の注意を喚起したいと思ふ。氏の事業は、獨佛流の觀念論、理想論に心酔した明治大正時代の人達から、不當に低い取扱を受けて居たかのやうに見える。氏の冤を雪ぐために、余は氏の『文明論之概略』の結句を引かうと思ふ。同書は、『自國ノ獨立ヲ論ズ』を結章としてゐる。



「結局ノ目的ヲ自國ノ獨立ニ定メ恰モ今ノ人間萬事ヲ鑒解シテ一ニ歸センメ悉皆コレヲ彼ノ目的ニ達スルノ術トスルトキハ其ノ術ノ煩多ナルコト際限アル可ラズ制度ナリ學問ナリ商賣ナリ工業ナリ一トシテ此術ニ非ザルハナシ營ニ制度學問等ノ類ノミナラズ或ハ鄙俗虛浮ノ事盤樂遊嬉ノ物ト雖ドモヨリ其内情ヲ探テ其歸スル所ノ功能ヲ察スレバ亦以テ文明中ノ簡條ニ入ル可キモノ多シ故ニ人間生々ノ事物ニ就キ其ノ利害得失ヲ談ズルニハ一々事ノ局處ヲ見テ容易ニ之ヲ決ス可ラズ譬ヘバ古ヨリ學者ノ議論甚ダ多シ或ハ節儉質朴ヲ主トスル者アリ或ハ秀美精雅ヲ好ム者アリ專制獨斷ヲ便利ナリトスル者アレバ磊落自由ヲ主張スル者アリ意見百出西ト云ヘバ東ト唱ヘ左ヨリ論ズレバ右ヨリ駁シ殆ド其極ル所ヲ知ラズ甚シキハ嘗テ定リタル所見モナク唯一身ノ地位ニ從テ議論ヲ作り一身ト議論ト其出處榮枯ヲ共ニスル者アリ尙コレヨリモ甚シキハ政府ニ依頼シテ身ヲ掩フノ地位ト爲シ區々ノ政權ニ籍テ唯己ガ宿說ヲ伸サントシ其說ノ利害得失ニ至テハ忘レタルガ如キ者アリ鄙劣モ亦甚シト云フ可シ裁判所ナキニ訴ルガ如シ孰レヲ是トシ孰レヲ非トス可キヤ唯是レ小兒ノ戯ノミ試ニ見ヨ天下ノ事物其局處ニ就テ論ズレバ一トシテ是ナラザルモノナシ一トシテ非ナラザルモノナシ節儉質朴ハ野蠻粗暴ニ似タレドモ一人ノ身ニ就テハ之ヲ勸メザル可カズ秀美精雅ハ侈奢荒唐ノ如クナレドモ全國人民ノ生計ヲ謀レバ日ニ秀美ニ進マン事ヲ願ハザル可ラズ國體論ノ頑固ナルハ民權ノタメ大ニ不便ナルガ如シト雖トモ今ノ政治ノ中心ヲ定メテ行政ノ順序ヲ維持スルガタメニハ亦大ニ便利ナリ民權興起ノ粗暴論ハ立君治國ノタメニ大ニ害アルガ如クナレドモ人民卑屈ノ舊惡習ヲ一掃スルノ術ニ用レバ亦甚ダ便利ナリ忠臣義士ノ論モ耶蘇聖教ノ論モ儒者ノ論モ佛者ノ論モ愚ナリト云ヘバ愚ナリ智ナリト云ヘ

バ智ナリ唯其コレヲ施ス所ニ從テ愚トモ爲ル可ク智トモ爲ル可キノミ加之彼ノ暗殺攘夷ノ輩ト雖ドモ唯其事業ヲコソ咎ム可ケレヨク其人ノ心事ヲ解剖シテ之ヲ検査セバ必ズ一片ノ報國心アルコト明ニ見ル可シサレバ本章ノ初ニ云ヘル君臣ノ義先祖ノ由緒上下ノ名分本末ノ差別等ノ如キモ人間品行ノ中ニ於テ貴ブ可キ簡條ニテ即チ文明ノ方便ナレバ概シテ之ヲ擯斥スルノ理ナシ唯此方便ヲ用ヒテ世上ニ益ヲ爲スト否トハ其用法如何ニ在ルノミ凡ソ人トシテ國ヲ賣ルノ惡心ヲ抱カザルヨリ以上ノ者ナレバ必ズ國益ヲ爲スコトヲ好マザル者ナシ若シ然ラズシテ國害ヲ爲スコトアラバ其罪ハ唯向フ所ノ目的ヲ知ラズシテ偶然ニ犯ンタル罪ナリ却テ世ノ事物ハ諸ノ術ヲ集メテ功ヲ成スモノナレバ其術ハ勉メテ多キヲ要シ又多カラザルヲ得ズ唯千百ノ術ヲ用ルノ際ニ其用法ヲ誤ルコトナク此術ハ果シテ此目的ニ關係アルモノ歟若シ關係アラバ何レノ路ヨリシテ之ニ達ス可キモノ歟或ハ直ニ達ス可キ歟或ハ間ニ又別ノ術ヲ置キ此術ヲ經テ後ニ達スルモノ歟或ハ二ノ術アラバ孰カ重クシテ先ナル可キ歟孰カ輕クシテ後ナル可キ歟ト様々ニ工夫ヲ運ラシテ結局其最後最上ノ大目的ヲ忘レザルコト緊要ナルノミ猶彼ノ象棋ヲ差ス者ガ千種萬様ノ手ハアレドモ結局其目的ハ我王將ヲ守テ敵ノ王ヲ詰ルノ一事ニ在ルガ如シ若シ然ラズシテ王ヨリ飛車ヲ重ンズル者アレバ之ヲ下手象棋ト云ハザルヲ得ズ故ニ今コノ一章ノ眼目タル自國獨立ノ四字ヲ掲ゲテ内外ノ別ヲ明ニシテ以テ衆庶ノ由ル可キ道ヲ示スコトアラバ物ノ輕重モ始テ爰ニ量ル可ク事ノ緩急モ始テ爰ニ定ム可ク輕重緩急爰ニ明ナレバ昨日怒リシ事モ今日ハ喜ブ可キモノト爲リ去年樂ミシ事モ今年ハ憂フ可キモノト爲リ得意ハ轉ジテ心配トナリ樂國ハ變ジテ苦界ト爲リ怨敵モ朋友ト爲リ他人モ兄弟ト爲リ喜怒ヲ共ニシ憂樂ヲ同フシ以テ同一ノ目的ニ向フ

可キ乎余輩ノ所見ニ現今ノ日本ノ人心ヲ維持スルニハ唯コノ一法アルノミ。」  
自國の獨立を以て、あらゆる文化の基準としてゐた福澤諭吉氏の面目躍如たるものがあり、片々たる空理を談ずるの徒でなかつたことはいふまでもないことながら、淺薄なる唯我獨尊を高調して國家を忘れるやうな物質尊重論者ではなかつたのである。

最後に、澤柳政太郎博士が、増修日本數學史に序して、『數年前ノ事ナリキ或ル雜誌ヨリ明治年間ニ著作出版サレタル圖書ノ内ニ於テ永ク後世ニ傳フベキ價值アリト考フルモノ三種ヲ舉ゲンコトヲ求メラレタルコトアリ。余ハ遠藤利貞翁ノ大日本數學史ヲ三書ノ一ニ數ヘテ答ヘタルヲ記憶セリ。蓋シ從來我が日本人ノ力ニヨリテ學術上一新機軸ヲ開ケルモノハ獨リ數學アルノミナラン。而シテ遠藤翁ノ數學史ハ翁ガ心血ヲ濺ギ幾ンド二十年ヲ費シテ成レルモノニシテ能ク我が數學ノ發達ヲ明ニスルモノナリ。我が文明史ヲ書クニモ、我が思想發達史ヲ著ハスニモ、亦我が日本國民ノ知能ヲ論ゼントスルニモ必ズ翁ノ數學史ヲ參考セザル可ラズ。是レ余ガ明治年間ノ著作中ニ於テ確カニ後世ニ傳フベキモノトシテ舉ゲタル所以ナリ。云々』というて居られるやうに、我が國の數學は以て世界に誇るに足るものであるが、特に、關孝和を以て最とする。林鶴一博士は、關孝和を略傳して、『關孝和(二三〇二—二三六八)今ノ群馬縣藤岡ニ生レ、幼時カラ計算ヲヨクシ、神童ト呼バレ、長ジテ徳川幕府ノ御勘定吟味役ヲ勤メタ。』

初メ數學ヲ高原吉種ニ學ンダガ後、自ラ天元演段歸源整法(點竄)圓理ナド和算ノ改良ヲ發明シタモノ甚ク多ク、時人算聖ト尊稱シ多ク其ノ門ニ集リ、關流ノ名ハ全國ニ廣マツタ。此ノ人ノ獨創ニヨル圓理ハ、丁度其ノ頃西洋デ「にゅーとん」ト「らいぶにつつ」トガ同時ニ發明シタ積分學ニ相

當スルモノデ、米國ノ或ル學者ハ「日本ノにゅーとん」トイツテキル。

著書モ亦甚ク多ク我國ノ數學ハ此ノ人ニヨツテ著シク進歩シタ。明治四十年從四位ヲ贈ラレタ。』(女子算術教科書前附)というて居られる。數學の外、經濟學においても偉大なる學者に乏しからず、『惡幣盛んに世に行はるれば精金皆隠る。』というて、グレシヤムの法則を、グレシヤムとは離れて明言した『價原』の著者三浦梅園もあれば、農政學において世界史中に位置さるべき佐藤信淵もあり、社會問題解決に一新機軸を出して世界的なる二宮尊徳もある。我等は、歐米心酔の迷夢から醒めて、自らに包藏するもの、價値を識らねばならない。

こゝにおいてか文化と國家との關係を明らかにせねばならぬ。湯原元一氏は、『國家の存立を確立にし、またその發展を期するために、その主力を盡す點は、その時代と周圍の情況によつていろいろ異なつて來るものである。或は農業、或は工業、或は商業を主として、農業立國、工業立國または商業立國などを國是とする國もあり、或は軍備を主として軍國主義でゆき、或は法律制度を主として法治主義を尙ぶ國もある。しかし、これは皆一方に偏する國家の見方である。』

農工商業はもちろん、軍備法律でも、皆國家の手段であつて、その目的ではない。もしこんなものが國家の目的だとすると、國家には別に高遠な理想はないとはいはねばならぬ。それでも我等がすべてを抛つて國家のために盡す愛國心も實に張合がないことにならうではないか。そして、國家の目的は文化を措いて外にない。それなればこと明治天皇は憲法發布の勅語の中に憲法の目的について「其(臣民)ノ懿徳良能ヲ發達セシムコトヲ願ヒ」と仰せられたのであらう。懿徳良能の發達とは即ち人間性の培養發揮のことだから、我が國家の目的こそは文化にあることが明か

である。西洋ではやつと今頃になつて文化國家などいひ出してその目的を國民の人格改造におくものがあるけれども、我が國は建國の初から修身齋家を本とする王道主義であつた。そして、明治天皇はこれを右のお言葉で更に明白剴切にいひあらはしまつたのである。

今日富強をもつて鳴る國も數多くあるけれども、その中でこんな高遠な理想を掲げて歩一歩これを實現し、これを追求して已まぬ國家がどこにあらう。念へば、尊い我が日本帝國ではないか。』(新制中學修身教本卷四・二二五—二二七頁)と喝破してゐられる。本來文化の發達は、人類の國家生活と極めて密接な關係にあり、國家が、諸般の制度を整へ、社會の秩序を保持し、安んじて、國民をしてその志を暢べしめるとともに、學術・技藝・産業等を保護・助長することによつて、文化の顯著なる發達を見るのである。されば、國運の興隆と文化の發達は、互に表裏をなすものである。世界五大國の一となつて、世界に雄飛する我が國は、またその文化においても、世界を動かすに足るものを持たねばならぬ。

注意一 本節の教授に當つては、國史の教授と協調を保つことを忘つてはならない。而して、我が國民性を歴史に徴して、『一體日本國民は殘忍性には極めて乏しかつた。世界の歴史を通過して、日本國民ほど殘忍性の乏しい民族は餘り他にあるまいと思はれる。戰國時代には鋸引の刑だの、桃山時代には釜煎の處罰だの、江戸時代には火烙・磔刑だのがあつたが、これは環境の然らしめるところで、時代の變態性であつて、必ずしも日本國民の常態性ではない。近時西洋の殘忍的變態性が影響するが如きは、最も寒心すべきことで、古來の日本國民性には、人の肉を食ふとか、而皮を剥ぐとか云ふやうな、他國民に往々見られる殘忍性は甚だ少かつたのである。』(日本文化史・一〇—一二頁)といふ笹川臨風博士の所説は、『外國人は誤つて我が國を好戰國のやうに宣傳するけれども、我が國のやうに外國と事を構へたことが少く、平和の長く續いた國は世界にその例がない。』(大瀨・一六三頁)といふこ

とは、原理的説明ともなるものであつて、尊い注意である。外國人の惡宣傳は致し方なしとするも、國民自らがその惡宣傳に乗ぜられるにいたつては沙汰の限りである。

注意二 小野正康氏が、『よしその起源においては他國のものであつても、兎も角一度批判の支關を経て、特異の發達を遂げ、面目を一新して獨特の體系を具へた以上は、それはもはや日本のものであり、日本の生んだものである。事實起源を彼に仰いだものでも、それ以上の成果をあげてゐるのである。』

例へば、かの我が海運船舶を見よ、鐵道・郵便の諸事を見よ。更に又かの軍隊を見よ。これらは、徹底的に西洋の機械と技術と禮儀作法の殆んど全部の様式とを採用して、世界屈指の海國・交通國・軍隊の強い日本の存在を完成し、且つその面目を發揮してゐるではないか。就中軍人は、又同じく西洋文物を採用して、最も鮮かに「ヨーロッパ」的印象を與へる者の中で、例へば遍に西洋を崇拜するインテリ階級や華かに國際場裡に躍る外交官の中に伍して、最も純にして且つ強い日本主義者ではないか。この程、海運船舶についての如く、鐵道・郵便についての如く、又軍隊についての如く、よしやそれらの術語や色彩が異國の情趣を帯びるとしても、既に日本學としての血肉となりきつてゐる以上は、確かに日本の教育であり、日本の哲學であり、日本の宗教であるのではないか。それ故にこそ、かの水戸光圀は、伯夷傳を讀んでも、日本哲學的なる『大日本史』を書き、北條時宗は悟道の光に元の使を斬り、更にかの織田信長は敦盛の舞を舞ひ且諺つて桶狭間の突撃に大捷しえたのではないか。その他、古來の名僧・知識就中鎌倉時代の親鸞・道元・日蓮等に至つては、今更贅言を要せざる所である。』(日本學と其の思惟・教育研究第四百號所載・三三—三三頁)といはれてゐることは、傾聴に値する。

注意三 我が國民は、模倣性に富んでは居るが、獨創性に乏しいといはれてゐる。しかし、『北里博士・野口博士が醫學上、高峰博士・鈴木博士が化學上の發明・發見を以て、本多博士が特殊合金の發明を以て世界に貢獻したことなどは、周知の事例であるが、今後は一般の國民も其の努力に依り、一大文化を創造して、世界に貢獻する所がなければならぬ。』(白上・一五〇—一五一頁)こともたしかである。北里博士については、余に想出話がある。それは、余の外遊中、同學田岡教授と伊太利に遊び、コモルガノ。

マジョレ三湖の絶景を賞して瑞西に出でんとしたのであるが、汽車の時間の關係上、どうしてもシンブロン隧道の手前の一寒驛ドモドツツラに一泊せねばならなくなり、驛に近い一ホテルに行つた。ところが、帳場に一青年が宿の娘と話してをり、余等が宿帳に日本人と記すや、突如として、ドクター・キタザトを知つてゐるかと話しかけて来た。さうして、北里博士の研究の數々によつて啓發せられることの甚大であることを告げた。尙、野口博士も研究を通して知つてゐるといふことであつた。このことあつたがために、余は今なほ伊太利の小寒驛ドモドツツラの印象を新鮮に保持してゐるのである。後に獨逸に移り、ハイデルベルクでは、リツケルトから西田幾太郎先生の名を聞くこと屢々であつたことも、忘れようとしても忘れることは出来ない。我等はよき先輩を持つてゐるといふ感が深い。

## 參考一 支那思想と日本文化

日本の文化の發達は支那の文化に負ふところが多い。これは疑ふべからざる事實である。初めて支那の文化に接した時には、それに驚異しそれに隨喜して、及ぶ限り其のすべてを學ぼうとした。其の間に取捨を加へるだけの邊も無く力も無かつた。書物によつて與へられた其の思想に對しても、たゞ其の前に拜跪する外は無かつたのである。しかし日本の地勢風土が支那とは全く違ひ、日本人が人種言語風俗習慣に於いて支那人と全く異り、家族制度社會組織政治形態に於いても亦た何等の共通點を有たないのみならず、支那とは全く隔つてゐる相互の關係が密接でなかつたから、支那人の造り出した文化を學びつゝ、現實の支那及び支那人とは殆ど交渉するところが無くして獨自の生活、獨自の歴史を展開し、時の經つと共に漸次獨自の文化を創造して来た。それでありながら、知識社會の知識としては、何時の世にも支那の古典から與へられる同じ思想を同じやうに尊尙しそれをすべての準則としてゐたことは不思議とすべきである。徳川時代にあつて日本人の創造した政治上の制度も整頓し、日本人みづからの生活が産み出した徳道も發達してゐたに拘らず、なほ支那人の政治思想や道德教が昔ながらの古典によつて講究せられたのは、奇異なる現象である。これは上に述べた如く、支那思想の主要なるものが一種の宗教的權威を有する儒教だからであり、生活から離れた書物の上

の知識のみを學んだがために其の知識が知識として絶對せられたからでもあるが、他面からいふと、知識は、本來、知識として特殊の領域を有し、實生活と離れて存在すべき性質を有するからでもある。さうしてそれは、始めて支那の文化に接した時に支那の文字とそれに寫されてゐる支那語とを、知識社會の知識を盛る具として、其のまゝ採らなければならなかつたこと、従つて知識社會に於ては、支那の文字、支那の書物と支那人の考へかたとに拘束せられ、何時までもそれから解放せられることができなかったこと、によつて助けられてゐる。支那以外の文化、支那思想以外の思想に接する機會が無かつたことも、亦た其の一因をなしてゐよう。佛教は學ばれたが、それとても半ば支那化したものであり、又た其の思想の關與する領域が異つてゐたから、支那思想に對抗するものとは考へられなかつた。勿論、支那から與へられた知識が、一面に於いては、何時のまにか日本人の生活に順應して来るやうにもなつたので、例へば忠といふ語の如く語そのものは其のまゝ採用せられながら其の意義が變へられたり、日本人の生活に對してあまりに明白なる矛盾が感知せられた場合にはそれとの折衷もしくは調和が考へられたりしたこともあるが、それでも支那の知識の權威を疑ふには至らなかつた。たゞこれは知識を知識として、思想を思想として、取扱ふ場合のことであつて、實際の生活に於ては支那思想に何等の權威をも與へなかつた。さうしてそれは文藝によつて表現せられてゐる。

ところが、西洋文化に接するに至つて、知識社會に於いても始めて支那文化支那思想に疑を容れるものが生じて来た。それは支那のと違ふ文化があり思想があることを知つたためばかりで無く、それに刺戟せられて、日本人の生活と支那文化支那思想との矛盾に氣がついたからである。徳川時代の蘭學者や國學者の考にはさういふところがあつた。近ごろになつて所謂西洋を中心とする現代文化が益々多く取入れられ、むかし支那の書物によつて支那の知識、支那の思想のみを學び知つたのとは違ひ、生活そのものが此の現代文化によつて大なる變化をうけるやうになると、かくして變化した日本人の現實の生活と支那思想との矛盾はいよゝ／＼明かになり支那思想が此の時代になつて權威を失つたのは當然である。それは所謂西洋心醉の故では無くして、支那思想が現實の生活に不適合なものであることが、生活そのものに於て體驗せられたからである。たゞ知識社會の一隅にはなほ支那思想の前に拜跪する昔からの因襲が残存してゐると、全然生活を異にし文化を異にし思想を異にしてゐる日本人と支那人とを混同してそこから

東洋文化といふ空虚な観念を作り、さうしてそれが所謂西洋文化、其の實は日本人みづからの生活に内在するもの、に對抗する文化であるが如き妄想を懐いてゐるものがあるのと、さういふ方面の宣傳によつて今日もなほ支那思想に何ほどの權威があるやうに思はれてゐる。が、これは現實の社會を直視し現實の自己の生活を反省することができないからのことであるので、そこにはやはり支那思想によつて養はれた支那的の考へかたが存在するのである。日本人が日本人みづからの文化を創造せんがために、支那の文字、支那の文章の桎梏から脱せんことを努めてゐるに拘らず、かゝる宣傳者が支那の文字、支那の文章を尊重してゐることも亦たそれを證する。(岩波講座・哲學、津田左右吉氏・日本に於ける支那思想移植史、五八一―六一頁)

#### 參考二 佛教を外來思想と考へる我が國

佛教が印度から支那を通じて日本に『移植』せられたといふことは、何人も異論なく承認するところである。しかしそれは基督教がシリアから羅馬帝國を通じてゲルマンの世界に『移植』せられたといふのと些かも變りがない。しかも人は、例へば『獨乙に於ける基督教思想移植史』といふやうな題目を、恐らく曾て取扱はなかつたであらうし、また取扱はないであらう。何故ならそれは基督教傳道史の内のほんの一節であり、更に重大なことには、獨乙そのものが基督教の地盤の中で初めて獨乙として成立して來たのだからである。然るに我々は『日本に於ける佛教思想移植史』をさほどの奇異の感じなしに考へることが出来る。過去十數世紀に互る日本人の精神生活は、實は、佛教思想の地盤に於て形式せられたのである。佛教を取り除けば日本の文化は殆んど空無に近いであらう。しかもなほ人は佛教思想を『外來思想』と呼んで怪しまない。佛教思想の『移植』は依然として日本にとつての問題であり、佛教傳道史の一節としての佛教にとつての問題なのではない。この點に先づ我々は注目することを要する。獨乙人や佛蘭西人や英吉利人は基督教を『外來思想』とは呼ばない。そのことが顯著であるだけに、我々は一層この現象を重視しなければならぬ。

佛教思想が外來思想と見られるのは、かゝる見方を力説した國學者の運動に基くところが多い。殊に明治以後西洋文明への歸依によつて佛教が何らか異種的なものと考へられるに至つたのにもよるであらう。しかしかゝる運動や歸依が佛教を疎外するに成功

したといふことは、その根柢に於て、十數世紀に互る佛教の支配が基督教のそれと性格を異にしてゐたことを示すのである。即ち佛教は日本に於て極めて寛容であつた。異端を殺戮するといふ如きことは、異端者殺戮といふ如き嚴格な不寛容を一つの性格とする切支丹に對してのほか、殆んど行はれなかつた。否、それどころか、異端者といふ概念さへも明白になつてゐるとは云へない。

『外道』はまさしく異端者に當る言葉であるが、しかしそれは印度に於ける佛教外の初法を指すのであつて、日本のそれには適用せられて居らない。従つて佛教の内と外との對立は深刻化しなかつた。外なるものは『權現』として内に取り入れられる。本地垂迹の説の如きがそれである。かくして佛教の外なるものは、その外なるものとしての性格を破却することなくして内に包容せられたのである。この點は異教の神がサンタクローズとして基督教に取り入れられたのと全然趣を異にする。こゝに我々は佛教自身の非戰鬥的性格のほかになほ日本人自身の宗教に於ける寛容性を見出すべきであらう。彼らは佛に歸依するために固有の神の信仰を捨てなければならぬとは感じなかつたのである。現代に於てなほ顯著に見られるやうに、熱い信心を持つものが『神佛』を崇めることは何等矛盾ではなかつた。それは信仰に於ける徹底性の缺如とも見られるであらう。かくして日本人の佛教化は、佛教外的な要素の徹底的否定を意味するやうな『回心』ではなかつた。むしろ日本人の方が佛教をも己のものとしたのである。だから佛教が日本の文化の血肉となつた永い世紀の間を通じて、なほ佛教を『外來思想』と見做し得る可能性を持ち續けたのであつた。

以上の如く現代の歐羅巴人が基督教を外來思想と見做さないに反して日本人が佛教を外來思想と見做すといふことは、結局日本人の宗教に對する態度に基くと見られる。日本人が一つの信仰に『捕はれる』ことなく、容易に他の信仰をも容れ得るといふ點に着眼して云へば、日本人は本來信仰の自由を是認したとも云へるであらう。このことは我々が問題とする『移植史』にとつては特に重大な關係を持つてゐる。何故なら日本に佛教が『移植』せられて忽ち根を張り花を開いた状態は、まさに右の如き日本人の態度性格に基くからである。ゲルマン人はなるほど信仰に於て徹底性を持つてゐる。だから基督教への回心と共に基督教を外來視する可能性をも殺して了つた。しかしその代りに基督教の『移植』そのものは決して日本に於ける如く迅速に成功してはゐないのである。(岩波講座・哲學、和辻哲郎博士・日本に於ける佛教思想移植史、三―五頁)

參考三 明治文化の形成

ひるがへりて文化の方面を見るに、宗教には、明治維新に際し、復古氣分社會にみなざるにつれて、一時神道の諸派盛に興れり。それらはいづれもわが國の神祇を祭り、それ〴〵教義を立つるものなり。またキリスト教も開國進取の思潮にともなひて、やうやく江戸時代のながき教禁より解かれてその布教を許され、年を追つてひろまりぬ。されど古來最も深く人心にしみ、國民多數の信仰を支配するものもとより佛教にして、多くの信徒を有し、教界に勢力を占む。これら神・佛・耶の三教は、はじめ互に相排擊してまゝ迫害を加ふることもありしが憲法の制度ありて信教の自由を許されたるより、やうやく融和して、いづれも圓滿なる發達を見るに至れり。教育は明治五年新に學制を頒布し、貴賤貧富の別なく、男女こと〴〵學に就かしめ、初等教育より高等教育に至るまですこぶる遠大なる規模を以て教育の制度を定めたり。これより國民の普通教育はしだいに普及し、各種の専門教育は〴〵に進歩せり。殊に明治二十三年十月三十日、明治天皇教育に關する勅語を下して國民道徳の大本を示したまひしかば、教育の方針いよ〴〵確立したり。かくて全國官公私立の學校はます〴〵整備して大いに社會文運の向上をうながし、これがために諸種の科學・文學・美術・技藝はいちじるしく進歩したり、されど一時は新奇を競ふのあまり、文藝より風俗の末に至るまで、みだりに洋風を倣し、かへつてわが固有の藝術美風を顧みざるもの少からざりしが、ほどなく國民は自覺してよく國粹を保存し、兼ねて彼の長所を採りて遂に健全なる文運の發達をとげぬ。この間に圖書・新聞・雜誌などの出版事業も年と共に進みて、すこぶる文化の普及を助けたりき。

最近新奇なる思想のしきりに西洋より入來れるにつれ、わが國民の中にもこれが影響を蒙るものあると共に、經濟の急激なる發達は、やゝもすれば生活の安定を缺き、ために諸種の紛争を生ぜんとする傾向あり。されど社會には法律・道徳・慣習などあり、人々これを遵守することによりてその幸福を増進するものなれば、われらはこれを尊重して融和協調以て共存共榮の實を擧ぐるにつとむべきなり。今や、政治上には普通選舉を行ひて國民の政治に參與する範圍をひろめ、また陪審制度を設けて司法にも參與する途を開き、經濟上には小資本の農商工業者をして協同扶助の目的を以て信用・販賣・購買・利用などの産業組合を設けし

むると共に、一面救済保護教化の社會事業を起し、世界の進運にともなひて社會の健實なる進歩發達につとめつゝあり。

現時世界の思潮はすこぶる動搖し、國家の盛衰興亡も常なき時に當り、獨りわが國は健國以來萬世一系の皇室を中心として發展し歴代天皇の仁憐は國民の忠君愛國の至情と共に萬古かはらず、以て今日の繁榮を致せり。かくておほむね平和の中に育ちたるわが國民は、古來外國の文化を容れてよく國風に同化し、儒教も佛教もはた歐米の文化の皆その長を採り短をすてて、偉大なる成績を擧げ、こゝに燦然たる現代の文化を造りぬ。われらは將來ます〴〵この卓絶せる國體を擁護し、天地と共にきはまりなき皇運を扶翼したてまつり、また更に東西南洋の文化を融合して一大文化を創造し、以て世界の文明に貢獻せざるべからず。今や社會萬般の事業はすこぶる國際共同の氣分を帶ぶるに至り國際聯盟に於ては世界各國の軍備問題勞働問題など解決するため會議を開き、その他經濟に、教育に、學術に、はた赤十字事業に、通信事務に、いづれも萬國協議をとげて相互の利益をはかり、人類の幸福を進めつゝあり。最近わが國に於て汎太平洋學術會議の開かれて各國の諸學者來集し、各々その研究を發表討議し、世界文化の貢獻に光彩を放ちたるが如きは、なほ吾人の記憶に新なるところなり。われらよろしくこの趨勢にかんがみ、わが國家社會の發達に盡すと共に進みて世界人類共同の福利を増進することにつとむべきなり。顧みれば悠々數千年、わが帝國の歴史は燦として東亞の天地に輝けり。され、ひるがへりて世界に於ける帝國の現勢を見んか、その經濟力に於て歐洲の文明國に比すべくものあらず、その文化に於てまた彼に及ばざる所多し。前途はなほ遠く、われらの責任や重し、國民ます〴〵奮勵して可ならんや。(高等小學國史・第三學年用、第十二『現時の國勢一般』より)

參考四 關 孝和

關孝和新助ト稱シ、自由ト號ス。上毛藤岡人ナリ。幕府ニ仕フ。初メ高原吉種ノ門人ナリシガ、遂ニ日本數學ノ中祖ト稱セラル、ニ至レリ。

孝和始テ點竄術ヲ發明セリ。時ニ之ヲ歸源整法ト云フ。後チ松永良弼其ノ主君内藤政樹ノ意ニ從ツテ之ヲ點竄術ト改ム。以後點竄ノ名ニ維レ行ハレテ、歸源整法ノ名世人之ヲ知ラザルニ至リヌ。此編モ亦改稱前ニ係ルモ點竄術ト記シタルハ、畢竟世間ニ通

シ易カラムコトヲ思ヒテナリ。統術ノ語モ亦同意ナリ。

點竄術ハ、一ノ筆算法ナリ。關孝和初メ天元演法ヲ發セリ。此法朱傑ガ天元術ニ勝レルコト數等ナリ。

聞者感歎セザルハ無シ。孝和乃チ之ヲ擴メテ遂ニ點竄術ヲ發明シ、因テ約術、兩一術、竊管、堦術、招差、綴術、角術、滴盡等ヨリ圓理ニ至ル諸術ヲ發明セリ。諸術既ニ發シテ而後諸門分ル。故ニ之ヲ專言スレバ、則チ、點竄術ノ之ヲ究言スレバ則チ實ニ數學ノ全體ナリ。故ニ點竄術ハ西人ノ代數學ヲ以テ而シテ其境界更ニ廣シ。約術以上ニ於テ唯圓理ヲ除クノ外皆點竄術中ニ寓ス。

約術トハ互減、自約、齊約、互約、遍約、增約、損約、零約等ヲ謂ヒ、兩一術ハ即剩一術ナリ。一數ノ若干倍ヨリ他數ノ若干倍ヲ減シテ殘數常ニ一ト爲リ、或ハ一ヲ不足スルモノヲ云フ。

竊管術トハ以上ノ諸術ニヨリテ不定數ヲ決定スルノ法ナリ。整數術トハ各數互ニ關係シ、且ツ開方ニ及ブモ常ニ整ヘル數ヲ求ムルノ法ナリ。

招差術トハ、參差不齊ニシテ連續スル數ニ於ケルノ諸法ナリ。堦術トハ、圭堦、堦表、相乘堦等都テ堦數ニ於ケル諸術ノ總稱ナリ。綴術ハ、原ト宋ノ祖沖之ガ發セシモノナレドモ今其傳無シ。關氏ノ綴術ハ更ニ點竄術ヨリ之ヲ得タルモノナリ。故ニ名同シキモ法異ルコト知ルベシ。(沖之カ綴術ハ圓ノ徑周率ヲ求ムルノ法ナリ)。

角術トハ正多角形ノ諸術ヲ求ムルモノ。

適畫法トハ或ル數ノ限ヲ求ムル法ナレドモ、其理全ク極大或ハ極小ヲ求ムルノ法ヲ爲セリ。弧背ノ理ハ即圓理ナリ。之ヲ圓理弧背術ト云フ。其算法ハ綴術ニ屬ス。故ニ當時總稱シテ圓理綴術ト云ヘリ。而シテ之ニ屬スル所ノ諸術ノ發明又多シ。今一々之ヲ説クニ暇アラザレバ、後章其必要ニ際シテ其術ヲ解スベシ。但關氏ノ諸術中未ダ淨書成ラザル者アレドモ、其ノ發明既ニ成レリ。故ニ記ス。

孝和既ニ點竄術ヲ發明セリ。此レ諸術ノ由リテ起ル所ノ根元トス。實ニ點竄術ニシテ始テ過乘ノ省クベキヲ知り、諸數ノ分合ヲ辨ジ、諸式ノ解括ヲ明ニセリ。實廉ノ數ヲ明ニシテ平方式ノ算類術ヲ施スベキヲ知り、開方式ノ理ヲ詳ニシテ交商ノ理ヲ覺リ、交

商ノ理ヲ明ニシテ商ニ有商無商アルヲ知り、諸廉ノ性質ヲ明ニシテ、計式及雜乘等ノ法則ヲ生ジ、線面、體ノ性質ヲ詳ニシテ其諸關係ヲ知り、且諸適等ヲ選ビ、形象ノ變化ヲ審ニシテ、極數(極大、極小)ノ有無ヲ測リ、消長ノ理ヲ明ニシテ空數(零)虛數(無限)ノ性質ヲ知り、遂差ノ關ハル所ヲ明ニシテ招差法ヲ生ズ。

凡ソ是等ノ諸術ハ皆前人未發ノモノナラザル無シ。且ツ曰ク點竄術ハ變化自由ニシテ理意義表外ニ長ズルモノナリ。其快言フベカラズ。誠ニ千古ノ一術ト謂フベシ。昔者欽明ノ朝ニ支那算學傳ハリテ以來一ニ支那算法ニヨルノミ。光由以降稍々見ルベキモノアリト雖モ皆古流ノ迂術ニシテ一理貫通セル者無シ。

天元術ノ傳ハルアリト雖モ、亦何カアラム。然ルヲ關氏點竄術ヲ發シテ大ニ前代ニ卓越シ更ニ一機軸ヲ興シタリ。實ニ純乎タル日本數學ノ創發ト謂フベシ。

其術支那算術ニ勝レルコト甚ダ遠シ。蓋シ是ノ點竄術以上ノ發明ハ、唯日本數學ヲ興發セシメタルニ止ラズ。誠ニ此レ東洋數學ヲ發起セシメタルモノナリ。

於乎關氏ノ功夫レ大ナル哉。(遠藤利貞氏・増修日本數學史・一一三—一一六頁)

關先生之墓

先生諱孝和號自由稱新助姓關氏本姓內山兩氏世仕縣官先生嗣關氏爲人穎敏尤好數術老成嘗布算定以爲合先生年甫六歲僅見而舉其差衆皆歎服及長愈精天文律曆莫所不通時稱爲算聖撰著數十種門人數百人書行人傳辭乎盛矣寶永戊子十月二十四日歿葬于江都牛籠邑浮輪寺先生無子養姪爲嗣稱新七久之嗣絕孫亡盛業令聞日衰遂至不知其墓今茲齋藤正順本田芳信木村規房同過此寺偶遇斷表剝離而讀則先生之墓也即同志人人合資建碑使余銘陰銘曰令聞既衰遺教猶存志士脩墓廢冢復原師弟之誠其德斯尊

寬政項寅十月望日

江都鳩谷孔平信敏撰

向陵賀瑛之書

木多利明

齋藤正順

建

串原 改山景岡

横井包教
村田光盛
串原永峯
小管正路
本田芳信
木村規房

参考五 五代の苦心

病みつかれた六十ばかりの老人が、ふとんの上に起直つて、十五六の少年に、熱心に何か言聞かせてゐる。少年はひざに両手をついて、老人の顔をじつと見つめながら聞いてゐる。まくらもとに置いてある行燈の光はうす暗く、たて切つてあるしやうじのやぶれを、秋風がはたくとあふる。

「これまでも折々話した通り、四代前の歎庵様が、國利民福の本は農業を盛にするにあるとお氣づきになつて、始めて農學をお修めになり、りつばな書物をお書きになつた。それから元庵様・不昧軒様、二代つゞいて、前のお志をおつきになり、一そう研究を進められた。しかし此の農學といふ學問は、種々様々の事を、實地と學理の兩方から調べて行かねばならぬので、三代かゝつても、まだ全く手の着かない事が少くなかつた。そこで此の父も、何とぞ此の學問を大成したいと、四十餘年の間、寢食を忘れて其の道の書物を読み、國々の實地を調べ、本もあらはし、出来るだけは骨折つたつもりである。しかし思ふ程に仕事は出来ず、其の上政治上の事で度々殿様に上申した爲、役人にくまれて、終には國を立ちのかねばならぬやうになつた。それから諸國を歩き廻つたすゑ、あの毎日見舞に来てくれる門人たちに頼まれて、此所の銅の製法を改良したり、新しい鑛山を開いたりする爲に、此の山中へ來たのである。しかし此の分では、わたしの命は、とても仕事の出来上るまでもつまいと思ふ。」

老人は大分つかれたやうである。少年はてつびんの湯をついで老人にすゝめた。老人は一口飲んで横になつた。少したつて、今度は寢たまゝぼつくと話し出した。

「歎庵様は佐藤の家の農學の本をお開きなされ、元庵様はおもに氣候と農業との關係をお調べなされたが、おぢい様の不昧軒様はまた、地質や鑛物の方で新しい發見をなされた。此の方々のお書きになつたものは、大てい此所に持つてゐる。其の本については、後に又言聞かせるが、大體一身一家の爲でなく、一寸ぢに國の爲、民の爲につくすといふお考は、どなたも皆同じ事で、これが佐藤の家の學問の精神である。わたしも此の精神にもとづいて、主に海産物や水利の事を調べて、くはしく計畫を立てた事もあるが、いろいろの差支があつて、實行が出来ずにしまつた。これはまことに残念な事である。しかしわたしの四十年の骨折は、農學の進歩の爲には決してむだでなかつたと思ふ。」

此の四代の苦心の後を受けて、國家の爲に、此の學問を大成するのがお前の役目だ、十六のお前が、旅費も乏しい旅先で親に別れては、さぞ心細くもあらう、又つらい事もあるであらうが、父の此の願だけは、しかと心にとめて置いて、必ず仕とげてもらひたい。それにはわたしが死んでも國へ歸らずに、すぐに江戸へ出て、りつばな學者を先生にして、一心に學問を上げむがよい。古人も『志ある者は事終に成る。』と言つてゐる。」

目に涙をいばいたため聞いてゐた少年は、堅い決心を顔にあらはして、實行をちかつた。父は安心した様子でやがてすやくと眠つた。

これは今から百三十年ばかり前に、下野の國尾尾山中の旅人宿で起つた事で、この老人こそは出羽の國の醫者佐藤信季、少年は其の子信淵である。信季は其の後幾日かたつて、とうとう宿でなくなつた。信淵は父の門人たちの情で形ばかりの葬式をすますと、間もなく江戸へ出て、宇田川支隨・大槻玄澤などの人々をたよつて一心に西洋の學問をした。さうして終に當代第一の農學の大家となつて、國家の爲に富源を開發することが基だ多かつた。

歎庵以來代々力をつくして農學は、信季の望通り、信淵に至つて大成したのである。(尋常小學國語讀本卷九・第六課)

参考六 福澤諭吉



明治維新後の社會に大なる影響を與へたるものは、西洋思想の輸入なり。而して其の思想の紹介者として最も名あるは、福澤諭吉なり。

諭吉は豊前國中津の藩士にして、三歳の時父を失ひしかば、母の手一つに育てられぬ。十四五歳の頃より漢學を學び、二十一歳の時長崎に行きてオランダ語を修めしが、翌年長崎を去りて大阪に出て、緒方洪庵に就きて更に之を學べり。其の後安政五年、二十五歳、藩主の召により始めて江戸に出て、鐵砲洲の藩邸に塾を開きて、藩の子弟にオランダ語を教授せり。

諭吉の江戸に出でたる年は、恰も幕府が諸外國と條約を結びたる時なりき。諭吉其の頃横濱に遊びて外人の店に到りしが、オランダ語にては全く用を辨ぜず、世界の言語中、イギリス語の最も廣く行はるゝことを聞きぬ。こゝに於て大いに發憤し、是より専らイギリス語の研究に没頭したり。

是より先、幕府はオランダより一軍艦を購ひしが、萬延元年春、之をアメリカに遣はさんとす。諭吉、一行中の某氏に請うて其の從者となり、彼の地に渡りて、始めて文明國の實況を視察せり。歸國後、幕府の外國方に出仕し、翻譯の事を司りぬ。

文久元年冬、幕府使節をヨーロッパに遣はすや、諭吉も命ぜられて行を共にし、フランス・イギリス・オランダ・ドイツ・ロシア・ポルトガル等の諸國を巡視せり。諭吉が後年著したる「西洋事情」といふ書は、此の巡視中に得たる知識によること多しといふ。

其の後、慶應三年、幕府事ありて再び使節をアメリカに遣はしたりしが、諭吉またこれに同行したり。歸國後、鐵砲洲の塾を芝の新錢座に移し、年號に因みて始めて名を慶應義塾と命ぜり。斯くて熱心に教授に従事し、彼の戊辰の役、江戸市中の混亂を極めたる時にも、授業平生に異なることなかりきとぞ。

其の明治四年、更に義塾を三田に移し、益々規模を大にしたり。時に平亂漸くをさまり、學に志す者争うて此處に來集せり。諭吉の之を教育するや、總べてイギリス語の書を用ひて、力めて日新の知識を與へ、獨立自尊を主義として、國家有用の材を養成せり。

諭吉は斯く塾生を養成せるのみならず、又大いに書を著して、或は西洋の事情を述べ、或は外國の地理を教へ、或は理科の知識を與へ、處世の道を説きなどして、普く國民を導きたり。而して其の文章はむづかしき漢語・古語を避けて、多く平易なる言語を使用し、力めて通俗を旨としたりければ、人よく之を了解するを以て、其の著書廣く行はれたり。

明治三十三年五月、天皇其の功績を賞して、特に金五萬圓を下し給へり。翌年二月、六十八歳にて逝けり。(高等小學讀本卷二、第二十四課)

### 第三節 我が國の使命

建國以來悠々三千年の歴史を有しながら我が國は、その地理的環境と政治的事情との影響に基づいて、世界文化の主流から遠ざかつてゐたが、今や、その主流に棹さして、人類文化に寄與すべき任務を負ふに至つた。由來、西洋文化は物質的であり、東洋文化は精神的であるといはれてゐるが、これは、その傾向を示したただけで、兩文化の間には、かやうな概括的な表現によつては、區別し得ない特性を多分に持つてゐる。しかも、交通の發達・印刷技術の著しい進歩は、今まで隔離對立してゐた東西の文化を、次第に融合せしめつゝある。東洋文化も西洋文化も、それぞれ、自らのうちに缺けてゐるものを他から補ひ、以て、融合統一の最高文化の建設に精進してゐる。

東洋文化の最も確實な把持者としての我が國は、その特に最近における西洋文化の吸收・同化と相俟つて、世界の綜合文化の實現に干與し得る第一人者である。西洋文化の國にして、我が國民が西洋文化を消化したほどに、東洋文化を消化し得たものではなく、同時に東洋文化の國にして、我が國民ほど、西洋文化を消化してゐるものも、また、ないではないか。我等は即ち、選ばれたる國民である。

選ばれたる國民は、先づ自己を反省せねばならぬ。尋常小學國語讀本卷十二、第二十七課は、『我が國民性の長所短所』と題して、

「我が國が世界無比の國體を有し、三千年の光輝ある歴史を展開し來つて、今や世界五大國の一に數へられるやうになつたのは、主として我々國民にそれだけすぐれた素質があつたからである。君と親とに眞心を捧げ盡して仕へる忠孝の美風が世界に冠たることは、今更いふまでもない。忠孝は我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して幾多の良性美德が發達した。」

東海の島に據つた日本は、國家を建設する上に頗る有利であつた。四周の海が天然の城壁となつて、容易に外敵のうかゞふことを許さないから、國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。隨つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來て、いざといへば、學國一致國難に當る氣風を生じた。萬世一系の皇室を中心として團結した國民は、かくていよいよ結束を固くし、熱烈な愛國心を養成した。其の上我が國の美しい風景や溫和な氣候は、自ら國民の性質を穩健ならしめ、自然美を愛好するやさしい性情を育成するのに與つて力があつた。

しかし此の事情は一面に國民の短所をもなしてゐる。狭い島國に育ち、生活の安易な樂土に平和を樂しんでゐた我が國民は、とかく引込み思案におちいり易く、奮闘努力の精神に乏しく、遊惰安逸に流れるかたむきがある。溫和な氣候や美しい風景は、人の心をやさしくし、優美にはするが、雄大豪壯の氣風を養成するには適しない。殊に徳川幕府二百餘年の鎖國は國民をして海外に發展する意氣を消磨せしめ、徒に此の小天地を理想郷と觀じて、世界の氣勢を知らぬ國民とならしめた。

其の結果今日も尙國民は眞の社交を解せず、人を信じ人を容れる度量に乏しい。そこで海外に移住しても外國人から思ひ掛けぬ誤解を受けて排斥されるやうなことも起つて來る。すべて日本人の短所として、性質が小さく狭く出來たきらひがある。其の原因はいろいろあらうが、昔から此の島國で荒い浮世を知らずに過して來たことが、其の主たるものであらう。今日我が國が列強の間立つて世界的の地歩を占めた以上、かういふ短所はやがて我が國民から消去するであらうが、出來る限り早く之を一掃することは我々の務ではあるまいか。

支那・印度の文明を入れ、更に西洋の文明を入れて長足の進歩を成し遂げた日本國民は、賢明な機敏な國民である。他國の文明を消化して、之を巧みに自國のものとするのは、實に我が國民性の一大長所である。しかし此の半面にもまた短所がうかゞはれないであらうか。自分で思ふまゝに造り出す創造力は、十分に發揮せられたことがなく、昔から殆ど模倣のみを事として來た觀がある。習性となつては、遂に日本人には獨創力がないであらうと自らも輕んじ、外國人からも侮られる。しかし模倣はやがて創造の過程でなくてはならぬ。我々は何時かは模倣の域を脱して十分に獨創力を發揮し、世界文明の上に大いに貢獻したいものである。

我が國民には潔いこと、あつさりしたことを好む風がある。櫻の花の一時に咲き一時に散る風情を喜ぶのがそれであり、古の武士が玉とくだけける討死を無上の名譽としたのがそれである。日本人ほどあつさりした色や味は、ひを好むものはあるまい。あつさりしたこと、潔いことを好む我が國民は、其の長所として、廉恥を貴び、潔白を重んずる美德を發揮してゐる。しかしその半面には、物にあき易く、あきらめ易い性情がひそんでゐないか。堅忍不拔あくまでも初一念を通すねば、

り強さが缺けてはゐないか。こゝにもまた我々の反省すべき短所があるやうである。我が國民の長所・短所を數へたならば、また外にもいろ／＼あらう。我々は常に其の長所を知つて、之を十分に發揮すると共に、又常に其の短所に注意し、之を補つて大國民たるにそむかぬりつばな國民とならねばならぬ。」

と警告してゐる。深く省みるところあらねばならない。

自己の長所と短所とを反省した國民は世界における日本の地位を直視せねばならぬ。高等小學地理書第三學年用はその第十一課において、

「我が國は明治維新以來國運の發展急速にして、今や世界の五大國に列するに至れり。然れども其の領土の面積英・佛・米等に及ばず。しかも人口は急劇に増加し、殖民の事業亦未だ振はず、加ふるに産業は歐米諸國に比して尙及ばざるもの少からず。農業は古來開けたれども、耕地狭小にして農産物の産額必ずしも多からず、特に食料品の供給近年漸く不足を生じ、海外より輸入せらるゝもの次第に多きに至れり。」

鐵産物には石炭・銅等産額の稍々多量なるものあれども、鐵に至りては其の産額需要の増加に伴はず。工業は近年頗る發達し、生絲・綿織物・絹織物・綿絲等の産額次第に増加したるのみならず、海外に輸出せらるゝ額も漸く多きを加ふるに至りたれども、學理の應用機械の使用等に於ては、尙大いに發達の餘地を存す。商船は其の噸數近時増加して約三百八十萬噸に上り、貿易は年額四十億圓を超ゆれども、英國・米國等に比すれば尙及ばざること甚だ遠く、且概ね輸入超過なり。我が國の歳出は軍備の充實、各種事業の改善に伴ひ、次第に膨脹して十數億圓を超ゆるに至れり。又國債

は數度の大戦後及び關東大震災によりて急劇に増加し、約五十億圓を算し、外國債は其の約三分の一を占む。されば國民の負擔は其の富力に比して輕しと云ふべからず。

今や歐米の主要國は世界各地に其の勢を振ひ、殊に競ひて太平洋方面に於ける通商の利を收めんとす。隨つて交通の設備は益々改良せられて、東西兩洋間の通商・交通愈々頻繁となり、殊に東洋の天地は益々多事ならんとす。我が國民たるものは是等の事情に鑑み、世界の大事勢を察し、奮勵努力して、國運隆昌の基を樹て、世界の五大國の一たる實を擧げざるべからず。」

と説いてゐる。昭和三年の翻刻發行にかゝるものであるから、最新の資料を擧ぐるについて遺憾の點なしとしないが、そのいふところは勿論正鵠を得てゐる。この事實に、國際聯盟脱退の正式通告のなされた事實を附加して、光榮ある孤立の地位にある我が國の事態を正確に把握しなければならぬ。即ち、昨日までの東洋の日本が、今日、既に世界の日本になつてゐるといふも、我が國の現勢は、その國富において、未だ、歐米の文明國に比すべくもなく、その文化において、また、彼に及ばないことが多いことを自覺せねばならぬ。たゞ、西洋文化の國にして我々が西洋文化を消化したほど、東洋文化を消化し得たものはなく、同時にまた東洋文化の國にして我が國ほど西洋文化を消化し得たものも亦ないといふ惠まれた地位を利用して、綜合文化の建設に邁進して、世界文化に一大新時期を劃すべき明日の日本の大使命を自覺せねばならぬ。この大使命の遂行に當つてや、不撓不屈そのものともいふべき剛健なる國民精神を振作して事に當り、以て我が國威とともに、我が文化を中外に輝かさねばならぬ。然らば、かやうな重大使命を果たす者は誰か。いふまでもなく、青年である。青年をしてこの期待を空しうせしめざるところに、公民教育有終の美果は實る。

注意一 本節は、公民教育のしめくりをつけねばならぬ重要な節である。今まで學び來つた事柄の凡てが、ここで統一されねばならない。その統一の仕方は岐れて二となる。一に曰く、向内的、二に曰く、向外的。我が大日本帝國を護るといふのが第一の場合であり、我が大日本帝國の大理想を宇内に布くといふのがその第二の場合に屬する。その何れにせよ、我が國の歴史を尊重するといふことから出發せねばならぬ。

注意二 高等小學國史卷二は、第五十九『國民の覺悟』を以て終つてゐる。曰く、

『皇祖天照大神この國土を皇孫に授けたまひて、皇位の天地と共にきはまりなからんことを勅したまひ、神武天皇その御旨をうけて、大和地方を定め、はじめて即位の大禮を橿原宮に擧げたまひしより、歲月流れてこゝに二千五百九十餘年。その間萬世一系の天皇三種の神器を奉じてこの國に君臨し、萬民を撫育して一に國利民福を増進せんことをはかりたまふ。臣民また世々相つぎて忠君愛國の至情をあらはし、君臣の情誼は萬古かはらず。かくて尊嚴なる國體は世界にたくひなく、上下をつらぬきて光輝ある國史の成跡は、實にかゞやける日星の如し。』

されど時久しければ變おのづから生じ、世に治亂あり、政に弛張なき能はず。神武天皇の創業以來一千三百餘年をへて、官職世襲の社會制度は、やうやく蘇我氏ら豪族の土地人民を私有して專横をきはむる弊を生じ、皇威したがひて輕からんとす。こゝに於て藤原鎌足慨然として起ち、中大兄皇子をたすけて大化の政新を成しとげ舊來の弊を一掃して大いに皇威を振興したてまつれり。そのち皇運の盛なることおよそ三百餘年、奈良時代をへて平安時代の中頃に至り、藤原氏政權をほし、こゝに及びて、朝廷また衰へ、地方の政治すこぶるみだれて、天下の紛亂を招き、遂に武家の興起をうながして、王政の振はざることを二百年に及べり。そのち源頼朝武門より起りて海内を平げ、幕府を鎌倉に開きて萬民を安ぜしむ、幕府專權の端こゝにはじまり、これより天皇實權を有したまはぬことおよそ七百年の久しきにわたれり。この間にひとたびは建武中興の王政にかへりしも、やがて室町幕府開かれ、その中頃よりは威權次第に衰へて、天下麻の如く亂れしに、織田信長・豊臣秀吉相ついで出ててこれを鎮め、徳川家康を

の後をうけて江戸幕府を開き以て多年の太平をいたせり。然るに國史の研究起り、わが國體の明かとなるに及び、尊王の大義を論ずるもの多く、武家政治の非を鳴らすの聲は、當時の施政を難するの聲と相和し遂に王政復古の大業を起して、いよ／＼國體の正しきに復するに至れり。

明治の維新は未曾有の一大變革なるに、むしろ短期間に行はれしは、尊王の精神國民の間にみなぎりて、將軍進みて大政を奉還し、大名もまた祖先以來領有したりし土地・人民をたてまつりしによる。かくこの大業のきはめて圓滿に進みたること、古今東西の歴史にその類例を見ざる所なり。爾來明治・大正の昭代はわずかに五十餘年の間に驚くべき進歩をとげ、内は立憲の政體を確立し、東西の文化を融し、外は世界の列國と和親の實を擧げ、東洋の平和を固くせり。殊に東洋の平和につきては、天皇深く大御心をよせたまひ、國民また聖旨を奉じ、大いに力をこれにいたせり。

日清・日露の兩役をはじめとして韓國の併合・近くは歐洲大戰の參加に至るまで皆然らざるはなし。かくしてわが國光はおひおひに世界にかゞやき、今や五大國の一として建國以來實に比類なき地位に到達したり。

最近世界の外交はます／＼東洋を中心として行はるゝの傾となりたれば、我が帝國は東洋の列強として最も重大なる使命を帯ぶるに至れり。なほパリイ及びワシントンの會議によりて、世界の列強と共に、廣く人類平和のために力を盡すこととなり國民の責任はさらに重きを加へたり。

歐洲大戰以來、わが國民の思想はとかく動搖をまぬかれざりしが、たま／＼關東地方に大地震起り、一朝にして多數の人命と巨億の財物を失ひ、國家の損害はかり知るべからざるものあり。こゝに於て、かしこくも大正天皇は特に國民精神の作興に關する詔書を下して國民を戒めたまふ。われらつゝしみてその聖旨を奉體し、よろしく奇激の説をしりぞけて穩健中正の考をいだき浮華の俗を矯めて質實剛健の風を養ひ、以て國力の振興につとめざるべからず。

明治・大正の昭代をうけて、今やわれらは昭和の御代を仰へたり。政治上には普通選舉も行はるゝこととなりたれば、いよ／＼立憲政治の運用をあやまらざるべく、經濟の上には、ます／＼産業貿易を興すべく、また文化の上にも、たゞに外來の文化を同化

するにとどまらず、さらにわが文化を創造して、以て世界の文化に貢献すべきなり。

いやしくもわが帝國の國民たるものは光輝ある國史の成跡に顧み、常に國體の念を明かにし舉國一致して世界に於ける帝國の地位を向上せしめざるべからず。』反覆誦讀して、その實踐を期すべき大文字である。

注意三 更に、高等小學讀本卷三・第三十課『興國の民』は、『元氣旺盛にして進取の氣象に富み、目的の存する所、必ず實行の計畫あり。』

思慮周密にして決斷力に富み、計畫一度定まれば、直ちに之に着手し、勇往邁進、成功を見ざれば止まず。

活動を以て無上の樂しみとし、安逸を以て最大の苦痛とす。獨り自ら活動するのみならず、又能く人を活動せしむ。

自信の念篤く、自立自營、他を羨まず、他に依頼せず。

前途に希望を有して、人生を悲觀せず。不幸に遭遇するも落膽することなく、必ず新進路を求めて、運命の轉廻を圖る。

遠大の志望を抱きて、能く艱苦と戦ひ、終局の勝利を期待して、自彊息むことなし。

虚名を卑しめ、實功を貴びて、華を去り、實に就く。

義務の觀念強く、職責を重んじて、忠實業に服す。

己を持つること謹嚴、公德を重んじ、規律を尊び、高雅善美なる嗜好を有す。

氣宇闊大にして、人を容るゝの量あり。能く他國民と親和し、又能く之を同化す。

公平無私、能く事物の長短を識別し、我が短を捨つるに吝ならず、他の長を探るに敏なり。

協同一致の精神に富み、團結の力強く、公益の爲には私情を去り、私利をなげうつ。

行住坐臥、國家を思ひ、事を處する、必ず至誠奉公の精神に基づく。』

と、高らかに訓へてゐる。朗々として誦すべし。

注意四 『永らく東洋文化の上に築き上げられた我が舊文化と、西洋文化の礎の上に立つ新文化との間には相當に距離がある。

そこにまだ充分の融和と結合とがない。それは今後の解決に待たなければならない。人は云ふ、我が日本人の使命は東西兩文化の調和にあると。蓋し然るものがあらうが、言ふは易くして、功を收むることは難い。例へば思想問題の如きものも、我が日本に於てどう解決がつくべきであらうか。國體の尊嚴を保つて、日本人の天職を自覺し、我が國文化をして世界に光被せしむべきは、今後の國民精神の緊張と、努力奮勵とに期待すべきである。』（笹川臨風博士・日本文化史・一八〇頁）といふことは、洵に親切な注意である。實踐なるかな、躬行なるかな。公民科の本領は、どこまでも實踐・躬行にあるのである。

#### 参考一 國史に還れ

國史に還れ。日本國の歴史は、大和民族の系圖なり、吾人祖先の功科表なり、日本國民の經典なり。日本國を知るには、歴史を通して知るより他に方便なし。國史は實に忠實なる案内者、信頼すべき指導者なり。

吾人は歴史的に考慮せざるべからず。平等觀よりすれば、總べての人類は皆同胞なり。されど歴史觀よりすれば、總べての國は皆特殊の性格を具ふ。甲國と乙國とは同じからず、乙國と丙國とは同じからず、而して丙國と甲國とも亦同じからず。十國あれば十箇の差異あり、百國あれば百箇の差異あり。此の特殊の國性を維持する事によりて、始めて獨立國の意義全うせらる。獨立國の本義は、形式的に他の干渉を絶ち、自主の體面を保つのみならず、精神的にも、自主ならざるべからず。詳に言へば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展せしめ、發達せしめざるべからず。

我が大和民族の誇は、日本の歴史なり。此の歴史の中には、必ずしも悉く正しき事善き事のみあるにあらず、必ずしも悉く敬すべく仰ぐべき事のみあるにあらず。人は神にあらず。人の所爲には種々の過失あり、罪惡あり。されど總括していへば、日本の歴史は、大和民族の恥辱史にあらずして光榮史なり。

如何に我が皇室が世界に比類なきものかは、國史最も雄辯に之を語る。如何に我が國民が、一旦緩急あるに際して護國の精神を發揮せしかは、國史其の證人なり。又大和民族の中に、世界的偉人と比して一步も劣らぬ者、即ち世界的偉人と稱するに足る者を如何に多く生じたるかは、我が國史の明らかに示すところなり。我が明治天皇の盛徳大業も、此の國史の背景によりて始めて明白

に、精詳に、之を會得することを得。即ち五箇條の御誓文の如きも、國史の背景なきに於ては、唯一種の雄快なる文書たるに止る。帝國憲法の如きも、國史の背景なきに於ては、單に乾燥無味なる一法文に止る。

凡そ固陋頑冥の守舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは詭激狂妄の危險思想や、浮華輕薄の模倣精神や、何れも我が國史を閉却したるために生じたるものといはざるべからず。現狀を株守するも、國史を知らざるがため。現狀に不安なるも、國史を知らざるがため。國民的自信力を失するも、國史を知らざるがため。うぬぼれ根性にて、醉生夢死するも、國史を知らざるがため。

國史に還れとは、總べての國民に歴史家たれといふにあらず、唯日本國民として、日本の歴史の大精神を了解せよといふのみ。人或はいふ、我が國には天然の資源少しと。されど我が國民は豊富なる歴史を有せり。此の歴史は、實に日本の精神的寶庫なり。いやしくも國民的に生活し、且活動せんとせば、先づ此の寶庫に向つて、總べてのものを求めよ。(徳富猪一郎「國民小訓」ニ據ル)(高等小學讀本卷二・第三十課)

## 參考二 歐米人の日本人觀

歐米の學者や旅行家の中で、著書や雜誌で我が國民に關する批評を公にしたものが少くない。其の觀察は精粗區々であり、中には當つてゐないものもあるが、左に掲げる諸點は各人大抵一致する所で、よく我が國民の長所と短所を指摘し得てゐるやうである。

日本人は身よりも家を愛し、家よりも更に國を愛する。故にたとへ一身を捨てても、家名を汚し、祖先を辱しめることを欲しない。實に君國の爲には命を鴻毛の輕きに比するのである。此の精神の表れる所、義侠心となつては、自ら進んで他人の難に赴き、榮辱の念となつては、一命を捨てても其の面目を完うしようとする。しかしながらまた之がために一時の客氣に驅られて、前後の分別を忘れ、輕舉事を誤るが如きこともないではない。

日本人は親族故舊に厚く、一門の中に貧困・不具・廢疾の者があれば、進んで之を扶助し、鰥寡孤獨の者があれば、力めて之を救済する。しかし此のために、やゝもすれば、自立自營の念に乏しく、困窮に會へば、直ちに親近の者にたよるといふ弊がある。

を免れない。

危急存亡の場合に、公共の爲に自己の利益を犠牲にすることを辭さないのは、其の長所であるけれども、平素事のない時には、公共の事に對して冷淡なのは、其の短所といふべきである。自治團體の事務を少數の理事者の專斷に任せて、團體所屬の人々は之に關知しないことや、會社・銀行等の經營を少數の重役に委ねて、株主が無關心であることなどは、歐米人の頗る怪しむ所である。

自分の權利をむやみに主張しない長所はあるが、又他人の權利を十分に尊重しない短所がある。多人数の集會に約束の時間を違へたり、商業の取引に契約を重んじなかつたりするやうなことは、つまり他人の權利を尊重しないからである。

敏捷で機智に富み、時に臨み變に應じて宜しきに處し、勇往進進して勝を一舉に制するのは、其の最も得意とする所である。しかしながら耐久持重の根氣が乏しく、事業を經營するにしても、一度つまづけば意氣沮喪して、また起つことが出来ない風がある。

禮讓の心が厚く、坐作進退の禮儀作法は備つてゐるが、一般公衆に對する公德心は尙甚だ幼稚なやうである。

古人は「他山の石は以て玉をみがくべし。」と言つてゐるが、是等外國人の批評も傾聴に値する所が少くないであらう。將來我が國の發展を期するには、國民固有の長所を發揮すると共に、其の短所を補ふことに力めなければならない。我等日本人の最も著しい短所は七度倒れて八度起きる執着心の缺乏と、信用を重んずる道徳心の缺乏とであらう。此の短所を去らなければ、世界列強の間に立つて、平和の競争に打勝つことは困難であらう。(高等小學讀本・卷四、第二十四課)

## 參考 國民精神作興に關する詔書

大正天皇は、大正十二年十一月十日、一般臣民に詔書を下し賜はつて、國民の精神を振作し、國家興隆の基を固くする道をお示しになつた。世に此の詔書を國民精神作興に關する詔書と稱してゐる。我等は今謹んで其の大意をうかよひ、誓つて聖旨に副ひ奉ることに努めよう。國家の理想は、民族の生存と發展とを圖り益々國家の價値を高めて行くことにある。此の理想に向つて進む國

家は興隆し、さうでないものは衰亡する。さうして此の理想に向つて進歩發展するには、國家を組織してある國民の道德が堅實であること、言ひかへれば民族の良心が鞏固であることを要する。詔書の始めに「國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ」と仰せられてあるのは、此の理をお諭しになつたものであつて、古今に通じ、東西に亘つて變らない道理である。此の剛健な國民精神は古來我が國では大和魂と稱してゐるもので、公明正大で不撓不屈な氣魄である。此の天地に漲る民族の氣魄が、君國の大事に際してはいふまでもなく、平時にあつてもよく發揮されて、皇運を扶翼し國運を發達せしめたのである。それ故、國民たる者は、此の精神を幼い時から十分に養ひ之を振るひ起して國の基を固くするやうにしなければならぬ。

明治天皇は國民の教育に深く大御心をお注ぎになり、わが國體に基き教育の淵源に遡つて皇祖皇宗の御遺訓をお掲げになり、國民の遵守すべき道德の大綱を明らかに指示になつた。明治二十三年十月三十日下し賜はつた教育に關する勅語が即ちそれである。其の後、國民の心が驕り、やゝもすれば荒み怠らうとする風が見えたので、更に國民に詔書を下し賜はつて、國運發展の道として、各自忠實に業務に服し、勤勉であると共に儉約を守るべきことをお勧めになり、又常に心に誠があつて言行に偽がなく、よく義理を重んぜよと懇にお諭しになつた。明治四十一年十月十三日下し賜はつた戊申詔書が即ちそれである。教育に關する勅語も、戊申詔書も其の御趣旨はいづれも人の履行すべき道德を尊重して國民精神を充分に養ひ、之を振起させようとする遠大な思召から出たものに外ならない。それ以來、國民の目あてとして進むところが定まり、國民は之をつゝし守つて、一心に奮勵努力したので、我が國の文化は著しく進歩し、國威は益々發揚されたのである。國家興隆の本が國民精神の剛健にあることは、之によつても明らかである。

大正天皇は、明治天皇の御遺業を受繼いで、國民精神を涵養振作するのを政治の御方針となされ、御即位以來日夜御親らお憤みになつて、益々其の御方針を進めて行かうとひたすら大御心をお盡くしになつた。しかるに思ひがけもなく、大正十二年九月一日關東地方に大地震が起つたので、天皇には畏多くも我が國運發展の將來に對して深く御心痛あそばされて、此の詔書を下し賜はつて國民の勉むべき道をお諭しになつたのである。

大正天皇の御代になつて、我が國の學問・技藝は益々開け、人々の知識は日々に進んで來たが、地方に於ては、歐洲大戰の影響を受けた經濟界の變調に促されて、人々の心が浮薄になり、華美を好み、放縱に流れようとする風が、次第に國民の間に現れ初め、又國情と相容れない外來思潮と相待つて輕はずみな不穩過激な氣風も生じて來た。國民は此の際に、反省自覺して時世の惡風を改めなければ、或は明治の昭代に於てせつかく盛大になつた國運も衰へるやうなことになるやうとする虞があつた。かやうな時弊の生じて來た上に關東大地震によつて我が國民が蒙つた損害は餘程大きかつたから、これまで進歩した文化を傳へて、更に之を復興し國力を振るひ起すといふことは、實に容易なことではない。此の時に當つて國民たる者は舉國一致して國民精神を振作更張して、國家の艱難を切抜け、國運の發展を圖るべきである。國民精神を振作更張する道は、明治天皇の下し賜はつた教育に關する勅語と戊申詔書との御趣旨につゝし従つて、其の實際の効果を擧げるより外はない。そこで國民たる者は、教育の淵源となつてゐる我が國體の精華を辨へ尊んで、智能の啓發と徳器の成就とに努め、以て修養が一方に偏らないやうにして圓滿な人格の發達を圖り、立憲自治の公民としては國憲を重んじ、國法に遵ひ、やゝもすれば亂れようとする政治上の道德を引きしめて之を勵行し、世の惡い風俗は之を改め、善い風俗は之を振興し、淫華放縱の風を斥けて質實剛健の氣風に向ふやうにし、輕薄で不穩過激な惡風潮を矯め直して、醇美敦厚で穩健中正の風となさなければならぬ。君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友などの道を明らかにして親和を致し公衆に對する道德を守つて社會の秩序を保つやうにし、自分の當然な責任を重んじ節制を尙ぶことが肝要である。我が國古來の美風である忠孝義勇の美德を益々發揮し、博愛衆に及し、共存共榮を念として厚く人と交るべきである。家にあつては恭儉己を持ち勤勉勵精して業務に従ひ資産を興し、又社會に出ては自分一己の利益に偏しないで、國家公共の福利を圖り、世上有益の業務に力を盡くすことが大切である。以上の心得を守つて我が國運の隆盛を圖り、民族の安らかに榮え、社會一般の幸福を増進するやうに努力しなければならぬ。

大正天皇は、深く臣民の協力翼賛に依頼して、いよ／＼我が國の根本を鞏固にして動かないものとなされ、以て先帝から受繼がせられた大業を益々擴張しようとする翼はせられた。又臣民に對して、よく聖旨を奉體して國民精神の剛健に勉むべきことをお望みに

なつていらせられる。

此の詔書は、大正天皇が關東大地震の後に國民のしたがひ守るべき道としてお示しになつたものであるが、其の御趣旨は教育に關する勅語戊申詔書と共に國民が永遠に奉體すべきものである。我等臣民たる者は、謹んで此の詔書の御趣旨を遵奉し、至誠を以て國民精神の作興に勉め、益々國運の隆昌を圖らなければならない。

明治天皇御製

いかならん事にあひてもたゆまぬは

わがしきしまの大和だましひ。

大正天皇御製

汐風のからきにたへて枝ぶりの

みなたくましき磯の松原。

(高等小學修身書・第三學年用第二十五・第二十六課)

#### 参考四 眞の公民

道徳を重んじ、善良な風習を維持することは、如何なる國民にも必要である。しかして國々は其の國體を異にし、民族の歴史も同じでないから、おのづから特色ある道徳と風習とが其の國に發達して來る。風習は國民の性質を反映するものであるが、同時に又國民の性質を陶冶する手段ともなるものであるから、國民たる者は道徳を重んずると共に、國風を維持することに努むべきである。

我が國にあつては、君民が合して一體をなし、君は民を愛護し、常に國家の隆盛を念とせられ、民は君を敬愛し奉つて心を一にして忠孝を勵んでゐる。これが我が國道徳の大本である。皇位・國家・臣民・憲法・公正・愛國の諸課は、此の義を明らかにしたものである。

家族制度は、我が國の社會組織の基礎であつて、家・祖先・親子・夫婦・親族に關する心得は、皆此の制度から生まれるものである。さうして祖先を尊び、家名を重んじ、親族相和すると共に、各其の分を守るのは、我が國特有の美風である。我が國民たる者は、永く此の善良なる風習を維持しなければならない。我が國にあつては、忠孝は一致して分れない。愛國の念もまた忠孝の精神から生れたものである。國家の制を維持して益々其の繁榮を致すには、實に忠孝の大義によらなければならない。

人格は人の人たる所以の資格である。家・國家等の社會は、人格によつて組織せられ、人格は又これらの社會の中に成るものである。人格は徳を以て其の内容とする。徳にはいろ／＼あるけれども、報國の念厚く智・仁・勇を兼備へ、之を貫ぬくに至誠を以てするのを其の根本とする。我等はこれらの諸徳を養つて各自の人格の向上を圖るべきである。

人は社會の中にあつて始めて人となることが出来る。社會を離れて人なく、人を離れて社會もまたあり得ない。我等は、社會と自分との關係をよく自覺することが大切である。社會にあつては、人は一定の職業を執り、社會の活動の一部を分擔しなければならない。職業に勤勉であれば、それによつて得た收入を以て一家の生計を維持し、餘財を蓄へて財産を造り他日の用に備へ、又世の公益に費すべきである。公益は秩序と共に社會成立の根本要件であつて、人々が私利を事とし、秩序を重んじないならば、共存共榮の生活を望むことは出来ない。名譽を重んずるのも自他の人格を重んずる所以であつて、また共同生活に缺くことの出来ない心得である。

國民精神作興に關する詔書は、我が國民の特に覺悟し、實行すべき心得をお示しになつたものであつて、教育に關する勅語、戊申詔書と共に、我が國民たる者の遵奉格守して怠つてならないものである。

我が國は、近年國勢がいよ／＼隆盛に赴き、世界に重きをなすに至つたけれども、文化の發達の上からも、經濟の進歩の上からも今後なほ國民の大いに努力を要するものがある。我等は此の聖代に生まれ合はせたことを喜び、いよ／＼奮勵して忠實に事に當り、以て廣大無邊の皇恩に酬い奉ると共に、我が國を益々隆盛ならしめることに努めよう。(高等小學修身書・第三學年用、第二十七課『總括』の全文)



## 參考五 昭和日本の使命

日本人は平和の使徒

日本は古來『武の國』である。さりながら同時に、嚴に瀆武を戒しめてゐる。茲に日本の本來の面目を窺ふことが出来るのである。徒らに武を用ふるのは暴であり、暴は即ち亂である。暴に走り、亂に陥れば、平を失する。平を失すれば、道に反することになつて、正しきを守るべき武の本質を潰すのである。故に日本に於ては未だ曾つて、武を濫りにしたことはないが、さりとして武を粗かにしたことがない。正道を拓き、仁愛を布くところの、皇道の精神を強く意識するからである。

日本を目して『武斷主義の國』と見做し、或は『侵略主義の國』と稱するのは、全く皮相の見解であつて、日本の武は只管平和を求むるためにのみ用ひられてゐる事實を知らぬ者の言である。日本が如何に平和を愛好し、如何に人類の安寧と福祉とを熱求してゐるかは、列聖の詔勅中至るところに高調されてある通り、極めて明々白々であるが、日本はこの大理想を達成するためにこそ、武を尙ぶのである。

日本國民は、無批判に、歐米の文化に感服して、傳來の日本精神を滅却してはならぬ。輝かしき三千年の歴史と、これを貫く大精神を體得して、皇道宣布のためにただ一途に直進せねばならぬ。そこに永遠の生命があり、平和の使徒としての榮光があるのである。

唯物論的邪道を排撃せよ。享樂主義的風潮を一掃せよ。又更に狹量なる小乘的忠誠愛國に偏する勿れ。而して冲天の氣魄を以て、大乘的 忠大愛國精神を以て、毀譽褒貶の外に立つて萬事に對處し得るだけの大度量がなければならぬ。

曾て、フランスはプロシヤのために一敗地に塗みれ豊饒なるアルサス、ローレンの二州を奪取されたのみならず、五十億フランの賠償金を賦課されて、一時はその再起すら疑はれたことがある。しかしこの屈辱に憤激したフランスは、一意國民の團結と、士氣の振作に努めた結果、五十億フランの賠償金の如きも、『敵國の負債を有するは、フランス國民の最大の恥辱だ』といふので、十ヶ年の期限が與へられてあるにも拘らず、僅か三ヶ年を以てこれを完済し、環視の列國を驚倒せしめ、流石の鐵血宰相ビスマル

クをして、畏怖長嘆せしめたものである。爾來フランスは舉國一致精神力を總動員して、國力の復興を計り、雪辱の日を待つてゐたが、偶々歐洲大戰の勃發に際し、再び干戈を執つて、仇敵國ドイツと相見ゆることとなつた。そして戰爭の初期に於ては、機械文明の優れたドイツの旗色が良かつたが、物質力の盡くるときは即ち敗亡の時であつた。これに反して精神力を以て、固く團結したフランスは、敗けても敗けても折れはしなかつた。斯くて偉大なる精神力は、物質力を壓倒し、遂にフランスはドイツに勝つたのである。更にフランスは、戰爭中殆ど領土の大半を敵騎のために蹂躪されて、耕地は荒廢に歸し、都市は破壊され、その經濟力は一時全く壊滅に等しい慘狀を呈したが、それも束の間であつた。驚嘆すべきフランス國民の意氣は、再び國力復興の上に示されて、大戰後十年を出でずしてアメリカに次ぐ富裕國となり、戦前にも増した繁榮ぶりである。

吾人はこの一事例を見ただけでも、如何に精神力が偉大であるかを痛感せずにはゐられない。物質は頼むに足りない。萬事を解決するものは結局、鋭い精神力であり、旺盛なる意氣であり、又大局に即せる大抱負である。小乘的感情に墜ちず、大乘的大精神に立つ所にある。

人口問題も重要である。食糧問題も輕視することは出来ない。國際問題素より然りである。然しながら、それ等の一々について、無暗に憂慮し、恐怖することは避けねばならぬ。日本國民は今一段と高所に立つて、自己の進むべき方向を、考察する必要がある。かくて、自己本來の使命と任務を確認するとき、すべての問題は自ら氷解するのである。

## 昭和日本の使命

遠く建國の大精神を憶ひ、深く國民的信念に目覺むべき時が來た。吾人は時局が多難であれば多難である程、愈々益々意氣を振つて、これが打開に努力せねばならぬ。

畏くも 今上陸上踐詐の始めに方つて宜しく

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ宜シク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ舉國一體共存共榮ヲ之圖リ國本ヲ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謀ヲ顯揚セムコトヲ懋ムヘシ

眞に思想混亂し、勞資相闘ぐの世相の現状に鑑み、國民は深く内に省み、宜しく舉國一致眼を大局に注いで、大乘の大忠に志し、國本の培養に努むると同時に、國民の無限の繁榮を期し、以て 聖慮に應へ奉らねばならぬ。而してこの覺悟こそは、所謂昭和維新の基調をなすものであり、この基調の上に日に進み、日に新たなる我國是を伸べ、正に四方に會通して、大いに民心の更張を計るべく、かくして昭和維新の大業は展開するのである。

明治、大正の兩時代を通じて、漸次に興隆したる、國民的意氣を紹述して、更にこれを建國の大精神と合致せしめ以て 皇道を四海に宣布する、これが昭和日本の眞使命である。

力の乏しきを憂へてはならぬ。況んや物質をやである。すべては氣障である。意氣がすべてを解決する。皇國日本の進路を阻むものがあつたならば、その何者たるを問はず、斷乎として排撃すべく、一步も假借することを許さぬのである。

同胞よ！ 東亞の風雲が何うであらうとも、將た世界の空氣が如何に險惡であらうとも、敢て悲觀するを要せぬ。而して又末梢的感情、小乘の小忠によりて自己陶醉に甘んずる勿れ。

忠經に『夫れ忠は、豈惟君に奉じて、身を忘れ、國に殉じて、家を忘れ、色を正しうして、辭を直くし、難に臨んで節に死するのみならんや。沈謀潜運、以て國を正しうし人を安んずるにあり』とある。國を正しうし人を安んずる事、即ち我が肇國の大精神の意義の内に躍如としてゐる。一殺多生、三種の神器の劍の徳を輝かして大理想に進むべきである。

見よ！ 昭和日本の前途には陽が輝いてゐる。(荒木貞夫中將・昭和日本の使命、四二―五〇頁)

—〔終〕—

## 小學補習 公民教育資料大成 下卷

### 上卷補遺

上卷の脱稿後、昭和七年十二月までの間に、新たに起つた社會事象にして、是非心得置かねばならぬことを採擇して、茲に補遺をつくつた。今後も、上下巻とも、増刷の機會には、新材料を補充する積りである。尙、この上巻補遺は、次回からは、上巻の末尾に附するであらう。

#### 郵便貯金の利下げ (第三章第三節補遺)

昭和七年十月一日より郵便貯金の利子引下げが行はれ、通常貯金は年利四分二厘であつたのが三分となり、据置貯金は年利四分四厘四毛であつたのが三分二厘四毛となり、振替貯金は年利三分六厘であつたのが二分四厘となつた。この郵便貯金の利下げは低金利政策に順應し、以て日銀及び一般銀行の預金利子引下げを誘導するために行はれたものと云はれてゐる。一分二厘の利下げであるから預金者にとつては相當不利であることはいふまでもない。

#### 大東京に就いて (第十章第一節補遺)

昭和七年十月一日東京市とその隣接地域たる荏原、豊多摩、北豊島、南足立、南葛飾の五郡八十二箇町村が合併され、品川、目黒、荏原、大森、蒲田、世田谷、澁谷、淀橋、中野、杉並、豊島、瀧野川、荒川、王子、板橋、足立、向島、城東葛飾及び江戸川の二十區が新たに設置され、大東京の實現を見るに至つた。

合併前の東京市は面積二五、二二八、一五八坪、人口二、〇七〇、九一三人であつたが、大東京は面積一六七、一六三、四三二坪、人口四、九七〇、八三九人となり、人口に於てはニューヨーク市に次いで世界第二位であり、面積に於ては世界第五位である。而して大東京の實現を機として内務省によつて大

東京都制案が立案され第六十四議會に提案されんとしてゐる。その骨子は次の如くである。

**都の區域** 大東京の地域をそのまま都の區域とし三多摩は特別行政区とし大島八丈島小笠原島の三島嶼はこれを靜岡縣に附屬せしめること但し特別行政区たるべき三多摩は東京都と財政的に不可分であるから都に從屬する組織としその方法を考慮すること

**都の監督** 都は内務大臣の直接監督とす

**都長官の選任** 都長官は官選とし親任待遇とすその下に次長一人局長七乃至九人を置き勅任とすることその官制は都制案とは別個に立案すること

**都の組織** 東京市の現在の組織を破壊せず財務教育土木電気水道社會その他必要なる各局を置く

**警察權** 都長官に警察權を賦與し警察區域は三島嶼を除く現在の地域とすること

**都會議員** 人口數に比例すれば定員數百四十四人となるが百名内外に留めること都參事會員は十二乃至十五人とし任期は四年現在の市會議員は當然失格とすること

**議員選舉權** 府縣制に準ず

**區の組織** 區長は公選任期を四年とす

**區の區域** 大東京の區の區域による

**區の財務** 現行市制に準じ課稅權起債權を認めず寧ろ兩權を都長の手に集中すること但し區に對する事務の按配を改めその實務の増加を計ること

**率勢米價に就いて(第十三章第二節第一項補遺)**

米價の高低は農家にとつても一般消費者にとつてもそれ／＼の意味で重大な關係をもちこれが調節は極めて重要である。而してこの調節は米穀法の運用によつて米穀が過剩しその價格の暴落した年には適當にこれを買上げて倉庫に貯藏しやがて供給が不足してその價格が暴騰した場合にはこれを賣出して米穀の需要供給を調節することによつて行はれてゐたのであるが此の暴騰暴落の基準となる米價が率勢米價である。而してこの率勢米價は明治三十三年十一月以降の日本銀行調査米價指數の物價指數に對する割合を基礎とし當該米穀年度に於ける米價率の趨勢値を算出しこれを標準價格決定の前月の物價指數に乗じたものを日本銀行の基礎年月たる明治三十三年十月の米價十一圓八十一錢に乗じて算出した價格である。

さて、米價率(日銀調査米穀指數の物價指數に對するパーセンテージ)が各米穀年度(十一月より十月まで)でどんな傾向を示してゐるかを表示すれば次の如くである。

年 度	物價指數	米價指數	米價率
明治三十四年	九六・七八	一〇三・一七	一・〇六六
同 三十五年	九六・二二	一〇四・八三	一・〇八九
同 三十六年	一〇二・四三	一二四・六七	一・二二七
同 三十七年	一〇六・八六	一一一・二五	一・〇四一
同 三十八年	一一五・二〇	一〇七・五〇	〇・九三三
同 三十九年	一一九・〇〇	一二二・七五	一・〇三三

同 四十一年	二二七・九〇	一三七・九二	一・〇七八
同 四十一年	一二六・五八	一三八・三三	一・〇九一
同 四十二年	一一九・一九	一一六・九二	〇・九八一
同 四十三年	一一九・四五	一〇七・一六	〇・八九七
同 四十四年	一二三・九五	一四四・五八	一・一六六
大正元年	一三〇・八七	一六九・四二	一・二九四
同 二年	一三二・六六	一八三・八三	一・三八六
同 三年	一二八・一八	一四八・七五	一・一五九
同 四年	一二四・九七	一一〇・五〇	〇・八八五
同 五年	一四九・〇八	一一一・九二	〇・七五二
同 六年	一八七・〇七	一五八・〇八	〇・八三七
同 七年	二四四・三〇	二五二・七五	一・〇二四
同 八年	二九五・六四	三七一・三三	一・二五五
同 九年	三五八・七七	四〇九・六七	一・一四二
同 十年	二六五・四七	二四九・五八	〇・九三七
同 十一年	二六四・八二	三一七・七五	一・一七七
同 十二年	二五七・九八	二六七・九二	一・〇三八
同 十三年	二七二・四〇	三一九・一七	一・一七三

四

同十四年 二七〇・八六 三五六・一七 一・三一七  
 昭和元年 二四二・二〇 三二五・〇〇 一・三三四  
 同二年 二二五・一四 三〇二・八四 一・三四五  
 同三年 二二四・九六 二六五・一七 一・二七九  
 同四年 二二三・三九 二四六・〇〇 一・二〇二

これで見ると過去三十年の米價率は一高一低のうちにも、永い目で判断すれば大體一定の率を示してゐる。勿論こまかく研究すれば物價指數一に對して米價指數が小數點になつてゐる年も七年ばかりあつた。即ち嚴密にいへば率勢は幾分のカーヴを辿つてゐるわけである。しかし、この七年にはそれ／＼特殊事情があり、凹曲線を描くのはそれ自身米價の決定が合理的でなかつたためでも、もしこの種の年から特殊事情を差引くならば率勢は當然直線でなければならぬと云ふ見地から、ノルマルな状態を直線的なりとして、これを最小自乗法で算出すると、こゝに米價率超勢値といふものが出て来る。こゝに最小自乗法といふのは、「誤差の自乗の和が最小なる時に誤差實數は最小である」といふ公理に基いて經驗的價値から最も近い實際價値を求むる方法なのであるが、計算の結果によれば、昭和五年度の趨勢値は一一〇強となる。これに昭和五年九月の日銀物價總平均一七一・五ならびに基礎米價實數十一圓八十錢を掛けると、こゝに初めて昭和五年十月の率勢米價二十三圓九十一錢が出て来る。二割を限度として暴落暴騰點を算定するとそれぞれ十九圓十錢、二十八圓七十錢となる。

さて、率勢米價並びにその上下の限界はかくして決定されるのであるが、この率勢米價なるもの

の精神は、大體に於いて次の二點につくされる。

- (一) 米價の基準を常に一般物價より高位に置くこと。
- (二) 米價の變動を可及的狭い範圍に局限すること、殊に一般經濟界の波動に翻弄されないやうに努力すること。

而して、此の率勢米價の上下二割を限度として暴騰暴落點を定め、米價が其の點に達した場合に米穀法を出動せしめて米穀の需給を調節し、以つて米價の調節を圖り、農家の生産費割れを出来るだけ防止すると同時に一般消費者の生活をも脅かさないやうにしようとするのである。なほこのために米價需給特別會計が設けられてゐる。(エコノミスト昭和五年十一月一日號より)

#### 米穀法及び米穀需給調節特別會計法の改正(第十三章第二節第一項補遺)

政府は第六十三議會に米穀關係法案として、米穀應急施設法案及び米穀需給調節特別會計法中改正案の兩案を提出し、前者において植民地米の移入調節等をなし、もつて内地米需給關係壓迫の緩和を計る一方、後者の米穀特別會計改正案において米穀資金を増額し、米價の維持を計らんとした。しかるに政友會では米穀法中率勢米價なるものが存する限り、一方において如何に米穀買上資金を増加して見ても、肝心なときに米穀法を發動することが不可能である、即ちこれがあるがために米穀法の運用は阻害される。またこの法律が朝鮮米並に臺灣米に及ぼされない結果米價は不當の下落を來す場合が生じ、農民はこれによつて著しく損害を蒙つてゐるといふ實狀にある。そこでこれを矯正すると同時に凶作または災害のため、國民が飢餓に迫るといふ如き場合に、この米

穀法によつて政府の貯藏米を市町村を通じてこれら窮民に無償或は廉價に給與し、または現物を以て貸與し得ることに改め、さらに必要の場合は粟の輸入税を増減免除し得ることにしようといふので、米穀法改正案にこの主旨を盛り込み、政友會から議會に提出し、これとともに政府提出の米穀對策法案中米穀應急施設法案は衆議院で否決した。かくて貴族院は右米穀法改正案の回附を受けて種々審議を行つたが、同案中の米穀買上賣渡しの基準價格となるべき率勢米價の廢止その他に關し有力なる反對意見が起り、結局大修正を加へた。然るに衆議院側は容易に讓歩しないため遂に兩院協議會まで開き、漸く妥協點に到着して成立を見るに至つた。その骨子は次の如くである。

- (一) 政府は米穀の買替をなさんとする場合は必要なりと認むる時は命令の定むるところにより米穀を道府縣に對し貸附け得ること。
- (二) 本法施行の日より昭和八年十二月末日に至るまでは第四條の米穀買上げの場合に於ける最低價格は第五條の率勢米價の規定に拘らず命令の定むる米穀生産費によること、この生産費は米穀委員會に諮問してこれを定む。
- (三) 政府は當分の内朝鮮米及び臺灣米の内地移入數量を月別平均的ならしむるため朝鮮米及び臺灣米の買上賣渡、加工、又は貯藏をなし得ることとし、この場合に於ける買入または賣渡價格は時價に準據して定む。
- (四) 政府は當分の内米穀の數量または市價を調節するため特に必要ありと認むるときは勅令をもつて期間を指定し粟の輸入税を増減または免除し得ること。

問題の率勢米價は削除されなかつたのであるが、これは米價に關する一定の基準は米穀の買入、賣渡、いづれの方面より見るも必要であるといふ理由に基く。但し現行米穀法所定の率勢米價は生産費を割ること可なり甚だしいものがあるが故、目下の率勢米價のみによる米價決定の不備を補ふため、昭和八年十二月末日まで同法の原則によらずして生産費によることを要するといふ例外規定を新たに設けた。即ち昭和九年十月一日よりの分は率勢米價によるがそれまでは米の生産費に基いて買入最低價格を決めるといふのである。しかしてこれを昭和八年十二月末日と限定したのは、かゝる例外規定はなるべく短期間にすべしといふ議論が出たので一應左の如く決めておくときはその間に政府において現在調査中の生産費に關する正確なる統計も見出され、且つ別個に米穀政策に關する根本策も或はこの期間中には樹立されるのではないかといふ考慮の下に決定を見たものである。そしてこの生産費決定に當りこれを米穀委員會に諮問することとし、たのは、兩院協議會の結果附加されたのであるが、これはその決定を慎重にし公正を期する主旨による。

更に朝鮮及び臺灣米の移入統制、粟の輸入税變更ならびに米穀の道府縣貸附等はいづれも内地米價を相當のところ維持せんとする主旨に出でたものといはれてゐる。

なほまた原案にあつた凶作または災害の場合政府貯藏米の無償給與等を行ふといふ點を削除することになつたのは、元來米穀法は市價の調節を本體としてゐるもので、この目的に副はざる社會事業の性質を有するものを本法中に挿入するは、相異りたるものが同法案中に入ることになり、且つ市町村に無償で米を交附するときは非常の混亂を來す恐れなきにしもあらずといふ理由か

らだといはれてゐる。

次に米穀需給調節特別會計法の改正の眼目は、同會計に於ける借入金限度は従來三億五千萬圓であつたが、これでは米穀の需給調節上遺憾の點が少くなく、現に残存の資金は僅かに七千萬圓に過ぎないから、借入金限度を一億三千万圓増額し四億八千万圓とするといふにある。此の改正の結果、同會計の余裕資金は二億圓に達したわけであつて、これにより今後米穀の需給調節を計ることとなる。(エゴノミスト、昭和七年七月十五日號)

製絲業法(第十三章第二節第二項補遺)

製絲業は我が國の重要産業の一つであるが、大小の企業が亂立し、就中小規模の工場が多數を占めてゐる。これらの小規模工場はその設備の通小なる結果として、生産並びに販賣上の不備が少なくない。また資力薄弱なるため經營の基礎堅實を缺き、製品の改善を妨ぐる場合が存するのみでなく、一朝絲價に變動があるとこれに善處する力を有せざるため或は休業しまたは罷業の起るやうな工場が續出し、累を養蠶者及び従業職工に及ぼすことが少なくない状態である。これらの弊害を矯正し蠶糸業の健全な發達を計るために、製絲業を免許事業とするといふのが本法の趣旨とするところであつて、これにより製絲業經營に一定の基準を與へ、政府は斯業に對し監督を加へ、なほ必要の際は統制權を留保することとした。しかしてその要旨とするところは次の如くである。

(一) 製絲業者たらんとするものは主務大臣の免許を受くることを要する。

(二) この免許に關する必要事項は命令を以て定む。これは命令により百五十釜未満の小製絲工

場は免許しないこととする政府の方針である。

(三)本法施行の際現に製絲業者たるものまたはその承継人は、命令の定むる所により本法施行の日より、本法により免許を受けたるものと看做す。これは大工場と小工場とを問はず總べて免許を受けたものと看做される。

(四)主務大臣は製絲業者に對し製絲業統制上必要な事項を命令し得る。

(五)製絲業者が免許を受けたる日より二年以内に事業を開始せざるときはその免許は取消される場合がある。また引續き二年以上その事業の全部または一部をなさざるときはその免許を取消し、またはその事業を制限されることがある。(エコノミスト昭和七年九月十五日號)

#### 商品券の取締(第十三章第二節第三項補遺)

第六十三帝國議會を通過し、制定を見るに至つた商品券取締法は主として百貨店の商品券發行を取締らうとする目的をもつものである。即ち、百貨店は商品券發行により、營業上多大の利益を享受してゐるが、これは從來中小商業者が競争上最も苦痛とする所であるに鑑み、これら中小商業者の苦痛を緩和すると共に、一面に於いては現在商品券發行者の責任に關し何等の法制なき結果發行者の破綻または營業停止に際し、商品券所有者に不測の損害を蒙らしめたる實例に鑑み、商品券發行者の責任を保障することを必要と認め、結果、商品券發行者をして一定額以上の商品券發行額の二分の一以上の國債を供託せしむるとともに、その發行につき必要な取締を行ふこととしてゐる。而して商品券所有者はこの供託物につき他の債權者に先だち辨済を受くる權利を有

することになつてゐる。

#### 百貨店自制申合(第十三章第二節第三項補遺)

大資本を有する百貨店が中小商業者に對して甚大な打撃を與へてゐることは明らかな事實であり、商品券取締法の制定を見るに至つたのも、此の結果中小商業者の陥つてゐる窮狀を緩和しようといふ趣旨に出でたのであるが、一方百貨店組合の側でもその點に鑑み次の如き申合をなした。勿論この申合は中小商業者の不満の高まるを抑へると共に、百貨店相互の競争によつて經營費その他の多額に上ることを防止する目的をもつものであることは恐らく否定出來ないであらう。

「一、出張賣出シハ之ヲ行ハザルコトトス

二、商品券ニ就テハ當局ノ指圖ニ依リ供託等適當ナル措置ヲ講ズルコトトス

三、支店分店ノ新設ハ當分ノ内之ヲ行ハサルコトトス、但シ目下建設準備中ノモノニ就テハ之ヲ商工省ヘ具申シ諒承ヲ受クルモノトス

四、所謂囤政策ノ如キ廉賣方法ヲ採ラザルコトトス

五、適當ナルサーヴィスニ依ル顧客誘致ノ方法ヲ採ラサルコトトス

六、無料配達區域ハ東京ニ於テハ最近之ヲ整理縮少セリ關西ニ於テモ九月一日ヨリ之ヲ縮少ス

七、毎月一齊ニ三日ノ休業ヲ行フコトトス、但シ中元、歳暮竝ニ誓文拂賣出シ期間中ハ之ヲ除ク

八、商業組合法制定アリタルトキハ百貨店商業組合ヲ設立シ法規ニ據ル統制ヲ行フコトトス

右申合ノ實行ハ昭和七年十月一日トス

産業組合法中改正(第十三章第三節補遺)

産業組合の機能を充實し普くその利用を計り、以て中小農商工業者の更生を期する目的の下に、第六十三帝國議會に於て産業組合法の改正が行はれた。其大要は次の如くである。

- (一) 産業組合の信用限度を擴張して資金の融通を圓滑ならしめ、市街地信用組合及び經濟用品のみを取扱ふ購買組合、所謂消費組合以外の産業組合は保證責任または無限責任の組織を原則となし、聯合會に於いてはすべて保證責任の組織となすため、現在の有限責任組合または聯合會は今後五年以内にその組織を變更せしむることとする。
- (二) 産業組合の活動を促進し、農家をして普く組合を利用せしむる道を開くため、現在農村に發達せる農事實行組合を簡易の法人とし、また養蠶實行組合をも合せてこの農事實行組合及び養蠶組合が組合の儘で産業組合となつて、産業組合を利用し得るやうに改めた。
- (三) 道府縣區域の信用組合聯合會の機能を更に擴充するため、手形の割引をなし得ることに改めた。
- (四) 産業組合聯合會の資力充實のために、其の聯合會の組織者の有する出資口數を増加して百口以内とし、特別の事情ある場合には定款の定めにより五百口まで増加し得ることとした。

商業組合に就て(第十三章第三節補遺)

商業組合は第六十三臨時帝國議會に於て成立を見た商業組合法に準據して設立せられる一種の協同組合である。商業組合法は、現下の中小商業者の窮狀を打開しその自力更生を圖るため、新たに中小商業者に適切なる組合制度を立て、もつて各種の經濟的共同施設を行はしめ、且つ組合の強固なる統制の下に相互の規律協調を維持せしめ、また金融の疏通機關たらしめんとしたものである。

即ち、商業組合はこれを法人とし、左の事業を行ひ得ることになつてゐる。

- 一、組合員の取扱商品の仕入、保管、運搬その他組合員の營業に關する共同施設
- 二、組合員の營業に關する統制(價格協定も含む)
- 三、組合員の營業に關する指導、研究、調査その他組合の目的を達するに必要な施設
- 四、組合員に對しその營業に必要な資金の貸附または組合員の貯金の受入

次に商業組合を設立せんとするときは豫め地區を定め、その地區内において組合員たる資格を有するもの、過半数の同意を得て創立總會を開き、定款その他必要な事項を定め、役員を選任し、行政官廳の認可を受くべきこととなつてゐる。

なほ、商業組合の組合員の出資口數は一口以上であることは勿論だが、原則としてその有すべき最高限度は五十口とされてゐる。而して、組合員の責任は、定款により組合員に分賦せられる組合經費の一部の外は、其の出資額を限度とする。但し商業組合は定款の定むる所に依り、組合財産を以て其の債務を完済すること能はざる場合に於て、組合員の全員が其の出資額の外に、一定の保證金額を限度として責任を負擔するものとなし得る。



商業組合の機關としては、産業組合と同様に理事監事及び總會があり、總會に於ける組合員の議決権は原則として口數に拘らず平等である。但し、定款の定むる所に依り、一人に付議決権總數の十分の三を超えざる範圍内に於て出資口數に應じ、二個以上の議決権を有せしむることが出来る。

發券制度の改正に就いて(第十四章第一節補遺)

第六十二帝國議會を通過昭和六年六月十八日の官報で公布された兌換銀行券條例改正に關する法律により兌換銀行券制度は次の如く改正された。

- (一) 兌換銀行券の保證發行限度は十億圓に擴張された(從來は一億二千萬圓であつた)。
- (二) 兌換銀行券の制限外發行は十五日を越えてなほその發行を繼續せんとする時は大藏大臣の許可を要すること、日本銀行は十五日を超える制限外發行額に對し年三分を下らざる割合を以て制限外發行税を納むること、但しその割合は大藏大臣が時々これを定むること、なつた(從來は、制限外發行は總べて大藏大臣の許可を要し、且つ日本銀行は制限外發行額に對し年五分を下らざる發行税を納むること、なつてゐた)。

此の改正は日本銀行の公債引受能力を増大し、低金利政策への通路を滑らかにし、以て信用の増加を圖ること、要するにインフレーションを目標とするものである。

次に、以上の改正と共に日本銀行納付金法の制定によつて日本銀行納付金制度が採用せられた。その内容は次の如くである。

- (一) 日本銀行は事業年毎に純益金より拂込金額に對する年六分に相當する金額及び日本銀行條

例第十條により積立つべき金額の最小額に相當する金額を控除したる殘額の二分の一を政府に納付すること

- (二) 純益金より前記の金額及び納付金を控除したる殘額が拂込資本金額に對し年四分の割合を超過したるときはその超過金額の四分の三を更に政府に納付すること

- (三) 以上の納付金額は所得税法による所得及び營業收益税法による純益の計算上これを損金に算入すること

この改正によつて從來日本銀行に對して制限内の兌換券發行税を課し、又政府當座預金利息を徴して居つたのが廢止されたわけである。この改正は一つには日本銀行の株主に利益を與ふるものであるが、前の改正と同様インフレーションを容易ならしめんとするものである。

なほ、前記の保證準備發行限度の擴張と共に日銀帳尻項目が變更された。即ち、日本銀行の帳尻は從來、兌換券發行高、正貨準備高、餘力または限外發行貸出總額の四項目に分け、その殘高を毎日發表してゐたが、昭和七年七月一日から保證準備發行高が十億圓に擴張され、平時は殆んど制限外發行高を生じないことになつたので、これを機會にその發表形式を改め、今後は兌換券發行高、正貨準備、預金、貸出の四項目に分けてその殘高を發表することとなつた。しかしてこのうち預金とあるのは日本銀行の要求拂債務で所謂潜在通貨たる政府當座預金と民間銀行の當座預金であり、その増減が金融繁閑の指標となる點で兌換券發行高並びに民間貸出の増減とその作用を同じくしてゐる。なほ帳尻中貸出といふのは政府關係の貸出、例へば政府法定貸金、政府一時貸金などを除いた民間銀行に對するもので、その中には特別融通を含んでゐるが、毎月増減するものは商業手形の

割引と國債及び國債以外のものを抵當とする手形割引並びに外國爲替貸付金など伸縮性ある貸出で、固定的貸付金は特別融資以外に含んでゐない。昭和八年一月七日の日銀帳尻を示せば次の如くである。

日銀帳尻	七日繰越(單位千圓比較△増▲減)	
兌換發行	一、二一七、九三八	▲ 一〇三、三九七
正貨準備	四三五、〇六八	
預金	一六四、〇四六	△ 一〇、七三八
貸出	七一〇、七三六	▲ 四九、六八二

手形法の改正に就いて(第十四章第三節補遺)

手形に關しては、商法第四編手形に規定されてゐるのであるが、手形法の統一に關する條約と小切手法の統一に關する條約との二つが既に御批准になり、又第六十二帝國議會の議決を経て、手形法のみは既に國內法に編入された。そして、その實施は條約國中二十七ヶ國の批准があると同時に行はれることになつてゐる。この實施と共に商法第四編は全部消滅して、これに代つて手形及び小切手に關する統一法が、わが國に行はれることになる。

この條約の所屬書の定めてゐる統一法は大體において、ドイツ法の主義に混ふるに、英法の主義をもつてしたもので、わが國の現行法に比較すれば、種々の點において、甚だ實際に適合した便利なものである。例へばわが現行法では利付手形は認められてゐないが、この統一法では必要な程度

においてこれを認めてゐるのである。またわが現行法では、引受拒絶の場合に、擔保請求を認めてゐるが、擔保の請求は實際は殆ど行はれてゐないことであつて、統一法においては引受拒絶の場合に、直ちに償還の請求を認めてゐるので、この點も甚だ實際的である。またわが現行法では、手形の期日に於ける呈示の場合に、不可抗力が起つても、その呈示の期間は、そのために延長されることはないであつて、甚だ不便であるが、統一法では不可抗力による呈示期間の延長を認めてゐる。その他種々の點において、統一法の規定は、多く英法主義を混へてゐるだけ、それだけわが現行法よりも、實際的であるといつて宜しい。(松本烝治博士著「常識としての商法改正の話」六一―七頁による)

産業組合中央金庫法中改正(第十四章第四節補遺)

産業組合中央金庫は信用組合及び信用組合聯合會の中央金融を司る機關である。第六十三帝國議會に於いて産業組合法が改正せられるとともに、産業組合中央倉庫の機能を充實するため同金庫の組織者である各組合の出資口數増加、餘裕金運用方法擴張及び事業年度の改正等が行はれた。

出資口數は従來産業組合聯合會および産業組合とも各々二百口をもつて最高限度としてゐたのであるが、これを本法において擴大し、産業組合聯合會の有すべき出資口數は千口、産業組合の有すべき出資口數は五百口をもつて最高限度とすることに改正した。

次に餘裕金の運用については、従來(一)國債證券、地方債證券、(二)大藏省預金部もしくは主務大

臣の認可を受けたる銀行への預金、または郵便貯金、(三)産業組合聯合會または産業組合に對する短期貸付だけに限定されてゐたのを本法においてこれを擴張し、右のほか一般有價證券の買入をも行ひ得ることに改正を見た。但し、この有價證券買入に對しては、主務大臣の認可を受くることを要する。

更に産業組合中央金庫の事業年度はこれまで一ケ年であつたが、これは六ヶ月に改められた。

産業組合中央金庫特別融通及び損失補遺(第十四章第四節補遺)

現下經濟界の異常なる不況の結果、農村都市に於ける中小農商工業者の主要金融機關である信用組合及び信用組合聯合會の貸附金十億圓中固定貸しとなつてゐるものが三億圓ほどある。これがため産業組合の活動を阻害し、金融梗塞を來し、延いて中小農工業者の困憊は者しきものがある。そこでこの固定債権を資金化し、金融疏通を計るため、農樂組合の中樞金融機關である産業組合中央金庫に低利の資金を融通し、同金庫をして特別融通をなさしめ、その結果もし中央金庫に損失があつた場合に三千萬圓を限度として政府においてこれを補償するといふ趣旨の下に、第六十三帝國議會によつて産業組合中央金庫特別融通及び損失補償法が成立せしめられた。而してこの中央金庫の損失を公平に決定せしむるためには、勅令を以て産業組合中央金庫特別融通損失審査會を設置し、また補償は公債交付によつてこれをなすといふことになつた。なほ、産業中央金庫に對する政府の低資融通は向う三年間に一億圓、昭和七年度に於いて二千五百萬圓の豫定であり、償還の期限は本法施行の日より十五年以内となつてゐる。——(補遺終)——

本行は株券を加入  
本行は株券を加入

昭和八年六月一日 初版印刷  
昭和八年六月五日 初版發行

小學・補習公民教育資料大成 下卷  
中等學校

定價六圓八拾錢



不許  
著作者 廣 濱 嘉 雄  
發行者 東京市京橋區入舟町三丁目三番地 藤 原 惣 太 郎  
印刷者 東京市京橋區入舟町三丁目三番地 葛 原 秀 一

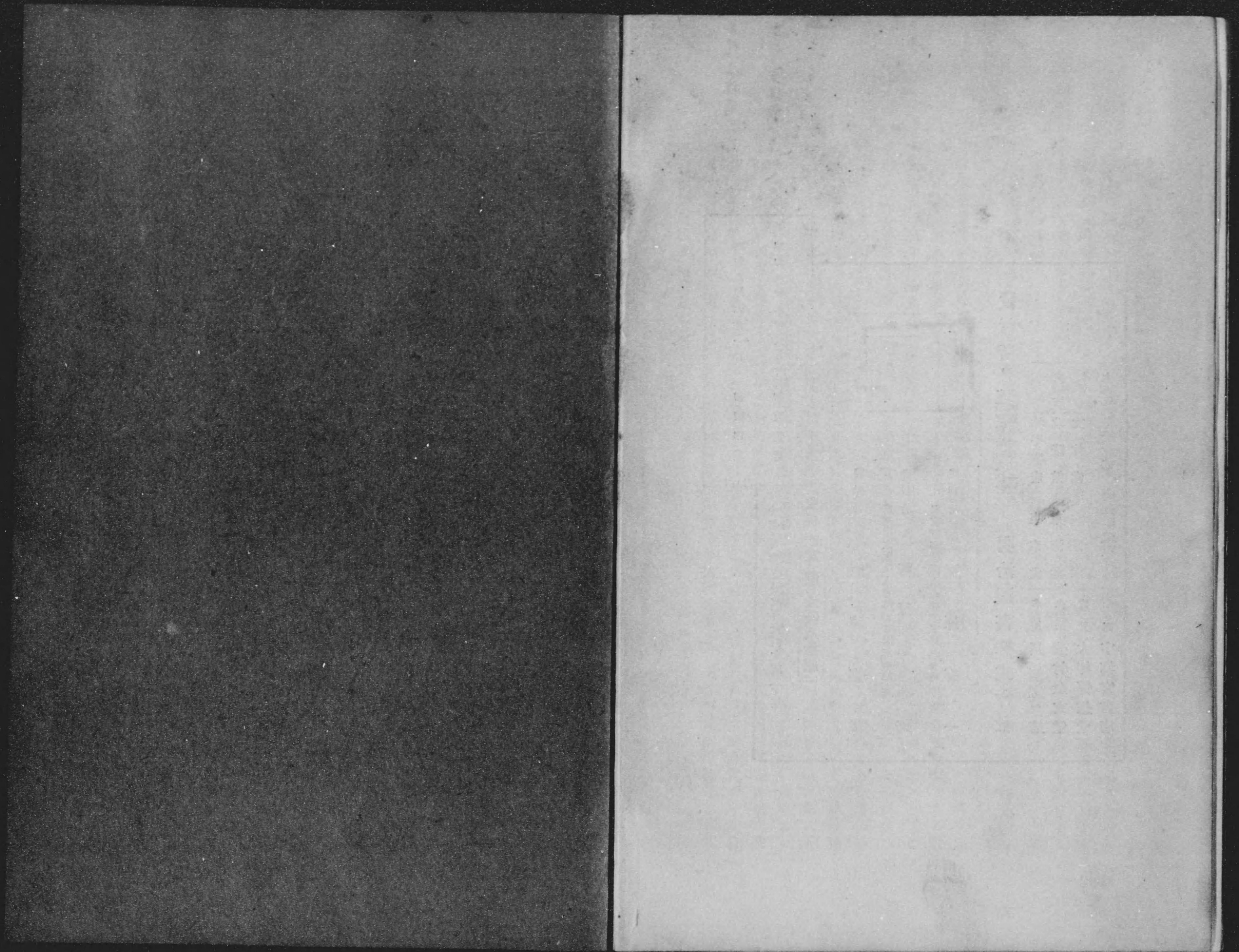
發行所

東京市京橋區入舟町三丁目三番地 振替東京一八五一三番

明治圖書株式會社

大賣捌所

東京 林平書店 東京 東海堂 名古屋 川瀬書店  
東京 北隆館 東京 盛堂 久留米 菊竹金文堂  
大阪 合資會社 柳原書店 金澤 宇都宮書店



275s  
62

